樣神の創造であらねばならぬ。若し然りとせば、神は自由意志を持つてゐても尙罪を犯さないことを得る樣な論理を持つた自由の人格を創造し得たに相違ない。又惡と戰ふことを必要とするは現在宇宙の常態であるが、現宇宙を作るに當り、神が萬善であたならば、惡と鬪ふの必要なき道德的の人間を創造するを合理的とすることが出來た筈である。何となれば、論理は神の創造によるもので、如何樣にも御意の儘に作ることが出來た筈なるが故である。然るに神が自分で作つた論理に拘束さるゝ樣では未だ以て眞に絕對的全能の神と云ふことは出來ぬと、マックタガアト一派の人は云つてゐる。人が罪を犯す可能なんか難有迷惑の恩惠である。神は論理に背いても尙人に罪を犯す自由など與へなかつた方が一層道德的ではない乎。吾等は論理の一致(コンシステンシィ)よりも道義上の一致(コンシステンシィ)を尊重すると云ひ、ハックスレイの如きは「自分は機械になつても傀儡になつても構はぬから、どうか常に善のみを行ふ人間として創造して貰いたかつた。惡を爲す自由の如きは鐚一文の價値なきもので、そんな自由など買ひ手があれば

どんな安賣でもする」と云ふた。

D. 全能神の自家撞着

吾等は今玆まで議論を進めて來た。即ち、神が邪惡を此世に認許し給ふは、他に良法あるにも拘らず、是れを敎育の一手段として利用し給ふのではない。事物本然の性質として、正邪、善惡、悲喜、哀樂の對照がなければ人生は無意義である。人間は是等の對立事故の經驗を經てのみ道義的に敎育さるゝので、それなくば彼は機械になつて了ふ、傀儡になつて了ふ。ハックスレイは斯る機械たらんことを希望せしも、自己人格の自由と獨立を尊ぶ吾等は如何にしても邪惡の經驗を經されば道德的性格を發展することは出來ぬ。又惡を擇ぶ可能なければ吾等に自由ありとは云ひ難い。見よ、玆にハックスレイの希望せし如く、吾等に善行のみの自由ありと假定し、惡行を爲す自由なしと假定せよ。此場合、吾等の自由は半減されて了ふ。併し夫れでも自由である

には相違ない。善惡兩樣の自由ある場合を三百六十度の自由とせば、善行のみの自由は百八十度の自由に過ぎない。併し夫れでも自由は自由である。而して此自由を自由に行使し、善事の內から或る善事を選び行ひ、他の善事を捨る自由ありと假定せよ、斯る行爲の自由が屢々經驗さるゝ時、必ずや吾等の價値判斷に於て或種の善行は他の善行よりも一層好き善だと云ふことになり、善事の內にも自から高下の區別を生じ、小善を避け大善に就くを以て一層道義的の生活となすに至るであらう。さすれば此世に善行だけの可能しかない場合に於ても、生活の經驗は自然〳〵と大善小善の區別を生じ、遂に善惡の區別が發生するに相違ない。されば意志の自由と惡の存在とは離るべからざる關係にあるもので、惡がなければ自由意志は在り得ない、自由意志がなければ人生は機械になつて了ふ。處で、神が人間の自由意志の爲に惡を除き給はないからとて決して其全能を非難することは出來ぬと。

併し此等の議論には自家撞着の矛盾がある。私は先づ彼等の主張する、道德的生涯

は必ずや惡と鬪はねばならぬ事業を必要とすると云ふことゝ、意志の自由は善惡二道の自由撰擇を意味すると云ふことを彼等の神觀に適用して考へねばならぬ。彼等は、神は完全に道德的だと云ふ、完全に道德的なるが故に惡と鬪ふ必要はない。惡と鬪ふことによりて品性を鍛練するは人間の事である。神は完全なるが故に左樣な道義的奮鬪の必要なしと。

右の辯明は成程と感心さるべきだが、彼等は最初、道德的生活には必ず善惡の對照が必要である、惡に逆つて戰ふ生活の事業がなければ道義は成立しないと云ふた。而して、神は惡なき道義的生命を創ることが出來ないからとて其全能を毀損することはない、そは事物本然の性質として不可能の事なるが故であると云ふた。若し此議論を徹底的に擁護しようとするならば、神も道義的の存在として惡に逆つて戰ふ戰士と見らねばならぬ。併し、若し神が惡に逆つて戰はねばならぬとするならば、彼は萬能だとも萬善だとも云へなくなる。何となれば彼は常に惡により抵抗されてゐるからであ

る。又神は宇宙の創造者であつて、神自身の生活の内惡に逆つて戰ふ事業ありとせば、そは神自身の内に惡あるを意味するものなるが故である。

之に反して神は萬善にして惡を抱容せず、又惡に逆つて戰ふ必要なき完全の實在ありとせば、是れ偶ま以て彼等の論據の薄弱なるを示せるものであつて、若し斯る實在宇宙に有り得るとせば、道義的にして同時に無惡なるは事物本然の性質として不可能ではないことゝなる。神御自身が其好適例ではない乎。されば神が左樣な道義的靈體であつて、而も惡の存在を必要とせざる實在なりとせば、人間を創造し給ふ場合にも同樣、道義的にして而も全然無惡の存在として之を作ることが出來た筈である。若し造ることが出來なかつたとすれば、彼は全能と云ふことは出來ぬ。何となれば、彼は出來得べき事を爲し能はなかつたからである。

第二に、彼等神學者は、神は絶對的自由を保ち、而も惡を爲さず。彼は行爲する每に惡を擇ぶ自由あるも必ず善を撰び給ふ。而も絶對的に自由の存在であると。若し然

りとせば、其處に絶對的自由者にして而も惡を爲さゞる實在が此宇宙に存在することを白狀するものである。然るに彼等は自由意志と、惡を撰ばないと云ふ制限とは、事物本然の性質として兩立しないと云ふた。故に神が人間を作る場合に自由意志を與ふと同時に惡をなさゞる樣制限を加ふることは出來ない、そして之が不可能なるが故にとて神の全能を傷けないと云ふたではない乎。然るに今神御自身の性質に於て絶對に自由なるも尙惡を擇ばないことを得る可能を認め得るならば、人間を創造する場合にも夫れが可能であつたに相違ない。即ち人間は意志の自由を以て尙善惡の撰擇に誤ることなく、常に善のみを選び行ふ樣作ることが出來た筈である。然るに此可能事を人間の場合に實現することが出來なかつたとすれば、神は全能だと云ふことは出來ない。

以上の理由により、如何に小理屈を附けても、此世に邪惡が存在する以上、所詮神は全能と云ふことは出來ぬ。されば吾等は現在、惡の存在を確認してゐるが故に、其當然の論結として全能神の挽歌を唄うて、彼を葬らねばならぬ。神學者は全能神を墓

塲に送るに忍びないと云ふ。何となれば吾等の多くは神は全能なりと信ずるが故に、神は吾等の頼りになるものである、若し全能ならずとせば神を信ずる必要なしと思うてゐるからである。乍併吾等覺醒したる現代人は神の全能を信ずる爲めに彼れの萬善を疑ふことを好まない。そは彼れの全能を立てんが爲めには彼れの萬善を否定せねばならぬからである。神は善の代表者である。吾等は寧ろ全能の神を葬つて、萬善の神にかしづきたいのである。又吾等が神の全能を否定するからとて、直に神は無能だと云ふものと考へてはならぬ。全能と無能との間には幾億萬里の差があるか分らぬ。吾等は神の全能を信ぜざれども、彼は人間に較べては殆ど話にならぬ程大能なるに相違ない、但し絶對的に全能ではないと云ふに過ぎぬ。

六　創造神(クリエータアゴット)の死

天地萬物創造の神も傳統的に世界の宗教が信じ來れる處で、クリスト教では、神は

萬物の創造主であつて、神に創られざる物は一物もないと云ひ來つた。若しさうだとすると、直に惡の存在が不可解となる。神が萬善なれば、よし彼れは全能ならずとするも、天地を創造し給ひし時、自分の性格と同樣善なるもののみ作り給ひし筈である。然るに事實然らずして惡も同時に造り給ひしとすれば彼は萬善だとは云へなくなる。

之に反して、神は萬善なれど萬物を悉く創つた譯ではない。即ち彼れの創り給はざる物が此宇宙にある。そは邪惡である。惡は始めから存在してゐたのであらう。或は神ならざる人が創造したのであらう。或は惡魔が造つたのであらう。されば神の責任ではないと、かう云ふことも出來る。若し然りとせば、吾等は神を絶對的に萬物の創造主と云ふことは出來ぬ。神は只宇宙の善なる半面のみの創造主であらう。或は既存の材料、そは善でも惡でもない、既存の材料を使つて、善なる世界、人生、人格などを創造し給ひつゝあるのであらう。惡魔が今宇宙を惡化せんとしつゝありとせば、神は宇宙を善化美化せんと働め給ひつゝあるに相違ない。吾等は神の存在を信じて惡魔

の存在を否定することは出來ぬ。若し惡魔が人心の妄想であるならば、神も人心の妄想であらねばならぬ。惡魔は多分神と同樣、既存の材料を惡用して、益々惡を造らんと力めつゝあるに相違ない。神は惡魔に逆つて戰ふ善の勇士である。吾等人間は彼の旗下に相集りて、惡と鬪ひて創造的に進化するものである。

神も既存の材料を使ひ、又惡の勢力に逆つて戰ひつゝ善の世界を打建て、善をして益々善ならしめんと努力し給ふ點に於て、彼れの行爲は創造的である。此意味に於て、人間も同じく創造的である。只人間の場合は其創造的行爲が神に較へて、殆んどお話にならぬ程貧弱だと云ふまでである。若し此意味に於て神を創造主と云ふのなら差支へはないが、そは是迄傳統的に信じ來りし如き創造主とは其意義內容が全く違ふ。されば、吾等は神を萬物の創造主(クリエーター)とは云へない。從つて創造神の觀念も吾等の神觀から葬り去らねばならぬ。

物質や物力が虛無より創造されたなど云ふよりも、無始無終に存在してゐると見る

方、今日の物質不滅說や物力不滅說にも能く一致する。然るに神が物質を創造せりと云へば、其神は誰れが創造したかと云ふ疑問が直に起る。夫れよりも、物質は自存のものであると見る方、進化論的に事物を解釋するには大に都合よいのである。神こそ却て物質中より進化し來りたる靈的存在なること、恰も人間が同樣物質より起りて生命に進化し、植物動物の域を經て、心的、精神的、靈的の人間に迄進化し來りたるが如きものかも知れぬ。昔の人は事物の根原を重視した。吾等は事物の現在及將來即ち其理想を重視する。されば、吾等の神は吾等と同樣、其根原は物質であつても差支へない。吾等人間の貴さは其根原が貴いからではない、其現在に於て、そが靈的の實在なるが故である。又將來に於て、一層靈的進化を遂ぐべき可能を示してゐるからである。されば、今吾等が、物質の起原を神に求めずして、神の起原を無始無終の物質に求むるも決して神を冒瀆するものではない。同じ論據により、物質や物力がよし無始無終なりとするも、只夫れが爲めに決して貴いものとはならぬ。そが善美の靈的存在

にまで進化した時に貴くなるのである。或は、そが善美の靈に奉仕する點に於てのみ貴いのである。昔の人は家柄自慢で、現在其人が人格の卑しい男であらうとも、先祖が偉かつた場合には其人を貴んで呉れたのである。然るに現代人は、親が非人であらうと穢多であらうと、其當人が偉ければ偉いとして貴ぶのである。神も人も其根原は物質であつても物力であつても差支へない。吾等は其現在及將來に於て其價値を批判せねばならぬ。私は進化の人を信ずる如く、進化の神を信ず。故に、神を萬物の絶對的創造主として既に進化の必要なき靈體とは信じ得ないのである。

七　結　論

吾等は形而上神、超然神、絶對神、全能神、及び創造神なる五つ柱の神々の爲めにお葬式を濟せた。併し、吾等は只破壞を事とするものではない。吾等は不合理な神觀を葬ると同時に、合理的な現代的神觀を建設せねばならぬ。先づ從來高級な文明人の

信じ來つた神の特性から、以上五個の特性を差引かば、何が殘るであらう。

第一に、神は形而上の神ではない、經驗の神であつて、吾等が日常生活に密接な利害關係を有し、吾等と共に靈的生活を營み給ふ神である。彼は超然にあらず、吾等の生活經驗に內住し給ふ者である。然り、吾等の生活經驗中或種の經驗（善美の如き）を神と云ふのである。神は吾等が善美の理想として、吾等の先輩として、指導者として、吾等と共に働き俱に樂しみ給ふ。彼は絶對者ではない、絶對的に完全ではない。されば彼は吾等と共に進化し給ふ神である。吾等は吾等の小なる程度に於て、創造的に人格の向上を圖り、宇宙の進化に參與する如く、吾等の神は大なる程度に於て、彼れ自身の一層偉大なる人格的靈的進化を遂げ、宇宙の向上發展を企圖し給ふのである。神は全能ではない、乍併、吾等の無能なるに較べては殆んど計り知られぬほど大能なる靈力である。されば常に吾等の靈的指導者として、吾等と共に生の闘ひを戰ひ給ふ神である。彼は宇宙の創始者ではあるまい。宇宙は無始無終に存在せるもので、限り

なく變轉しつゝある。其轉化の内に善の戰士として、美の創造者として、常に宇宙を善化、美化、淨化、聖化せんと努力しつゝある吾等の指導者として、神は常に有益なる吾等の靈的奮鬪の鼓吹者、奬勵者たるに相違ない。

乍併、神は完全ならざるが故に、吾等は神に助けらるゝと共に、神樣の事業を助くることが出來る。神若し絶對萬能なりせば、吾等の助力は畢竟無益である。何となれば、既に完全なる神を助くる餘地は勿論ないからである。又、彼れ若し全能ならば、神の事業を助けて『天國を此世に築かん』など吾等が企つるは神を侮辱するものではない乎。然り、吾等が全心全靈を捧げて天國の建設に從事せんなど云ふこと夫れ自身が既に神の萬能を否定せるものではない乎。神若し善美の代表者として、醜惡に逆つて常に戰ひ給ひつゝあるものとすれば、吾等が一事の醜惡に打勝つは即ち神の事業を眞實に扶助する譯である。吾等は神に助けらるゝと共に、神にも助力を致すことを得るが故に、人生の貴く且つ意義ある所以を知るのである。

現代人の自意識は益々明瞭となり、人格的義務責任の觀念は益々强烈を加へつゝある。吾等は封建時代に於ける君臣の關係に於けるが如く、只上より恩惠を仰いで以て滿足し得るものではない。我等は慈善院の厄介者ではない。吾等は獨立の人格である。神から多大の靈力を得て、吾等が日々の精神生活にいそしむことを得るが如く、吾等も神の事業に吾等の靈力を以て奉仕することを喜ぶのである。吾等は神の愛を得て悅ぶと同時に、又神に愛を捧げて、一層其喜びを增すものである。此愛や、奉仕や、若し神が完全圓滿絶對萬能の實在なりせば、そは全く有名無實のものとなる。されば、我等は是等傳說的の信條を排して、限りなき善美の發展の爲めに奮鬪し給ふ進化の神を信じ、積極的に限りなき善美の理想を實現せんが爲めに奮鬪せねばならぬ。吾等は斯くて宇宙の進化に何物をか眞に貢献しつゝ進み往くのである。吾等は宇宙の創造的進化を信ずる。吾等が日々の行爲は凡て夫れ此創造行爲に善か惡か、建設か破壞か、何れか其一なる効果を齎らすものである。されば、吾等の一擧手一投足は全宇宙に取

りて事實上甚大の意義を有するものである。然るに、若し其處に絶對萬能の神ありせば、吾等の努力は凡て夫れ無用の徒勞である。無意義のお芝居である。吾等は過去の生活經驗によりて善美の理想を打建て、之を實現せんが爲めに奮鬪しつゝある神を信ずるが故に、吾等の生命は彼れに取りても、吾等自身に採りても、又宇宙全體に取りても、大に意義ありと信ずるものである。

宗教の特質

一　ヘエゲル派の神秘的宇宙觀

ヘエゲル派の哲學者は宇宙の進化的過程を以て、絶對的自由意思の具體的自現（セルフリヤリゼエション）と見てゐる。西田博士の『自覺に於ける直觀と反省』の結論も略同樣であつて、彼れは『生命の發展とは具體的總全に向つて進むことである』と云うてゐる。茲に具體的全體とは、多分ヘエゲリヤンの慣用語、即ちコンクリイト　ユニヴアーサルの義であつて、特殊的普遍とも云ひ得べきものである。端的に云へば『圓い三角』と同樣で、具體的にして而も全體的、或は一般的なるものと云ふのであるが、乍御氣毒左樣なものは吾等の經驗にはあり得ない。なぜなれば、具體的なものは皆特殊のものであつて、抽象的のもののみ普遍的、一般的、全體的である。例へば茲に馬と云ふ普遍的

觀念がある。觀念上（抽象的）の馬は此の馬、彼の馬と云ふ如き具體的の馬ではない。であるから全體的の馬は決して具體的の馬ではあり得ない。又此の馬とか彼の馬かと云ふ特殊の馬は具體的實在であるが、それは決して全體的普遍的の馬ではない。されば、具體的の馬は決して全體的ではあり得ない。從つてヘエゲルの具體的總全（コンクリイトユニヴアサル）は圓い三角と云ふ如き自家撞着の觀念である。

乍併、ヘエゲル派の宗教哲學は常に此自家撞着なる『具體的總全』の實現を以て人生の目的とし、之を以て宗教の特色としてゐる。彼等は常に此有限の世界に在つて無限を味うとか、相對不完全の吾等人間が絶對完全の神を體現するとか云ふ言葉を用ひて、其處に恰も相對にして絶對、有限にして無限、運命にして自由、個體的にして總體的、瞬間的にして永久的、とか云ふ如き正反對なる二者の對立を超越した綜合（シンセシス）の地點あるを假定し、人間は分量的に宇宙の總全を體現し得ないが、性質的に神を體驗し得とし、神人合一の神秘を說いてゐる。是等の人々は中世紀の神秘論者が『我は爾

なり、爾は我なり』と云ひし感情的融合の神秘を傳統的に知能の言葉に飜譯したに過ぎない。彼等にして、若し其所謂絶對的自由意志とか、圓融無碍の完全とか云ふものゝ實在の根據を詰問さるれは、夫れは只必然の假定とか公準（ポスチユレエト）とか云つて逃げて了う。彼等は到底アプリオリ（先驗）の幽靈と緣を切ることが出來ないのである。人間が絶對完全を求むる欲望を持つてゐることが事實だとすれば、彼等は直に其處に絶對的に完全なものが先驗的に存在するものと假定する。ヘエゲルは此假定の上に立つてゐたから、彼れの宗教觀は、よし生物進化說を取り入れたにせよ、結局進化的ではなく、只轉化的で、既に現存する『絶對觀念』の具體的自現の過程を宇宙の運行だと見しに外ならぬ。

是れ畢竟、茲に現前するものは必ず過去にありしものでなければならぬ、有は無より生せず、只『似た物似た物を產む』（Like produces like）を自明の眞理と心得て、物に創造的の進化のあることを考へ得なかつた傳統思想の罪である。されば此種の學

者が宗教を研究するに當つて、人間に宗教的要求、即ち或る超自然的人格に對する靈交の欲求があれば、直に以て、人間に宗教あるは人性の本然に基くとなし、ツロルチの如きは人間には宗教的本能があると云ひ、サバチエは人間の宗教的なることは不治の病とでも云ふべきもの（Man is incurably religious）だと云うてゐる。

二　宗教的本能とは何ぞや

元來人間は本能的に宗教的なものであらうか。人間の宗教本能とは、どんなものであらうか。若し左樣な本能ありとせば、そは宗教でなければ滿足せしむることが出來ない本然的欲求であらねばならぬが、同樣な考へ方を今、道德や藝術や哲學に應用したら、どうであらう？　人間は藝術的欲求を持ち、藝術を作つて多大の滿足を買うてゐる。彼はインキュアラブリイに藝術的で、或は藝術本能に支配されて、さうするのだと云ひ得るであらうか。若し然りとせば、哲學も哲學本能により、道德も道德本能

によりて起つたものだと云はねばならぬ。」今此アプリオリな本能の觀念を嚴密に適用せば、吾等の生活一として或る特殊本能の發作ならざるはなく、藝術本能、道德本能、科學本能、社交本能、貯蓄本能、道樂本能……と萬事は無限に本能だらけの能狂言になつてしまう。

倫理學者は、よく道德心（モラルセンス）とか良心とか云ふものが先天的に在るやうに云つてゐる。カントの無上命令（カテゴリカルイムペラチイヴ）は此先驗的良心の謂ひであつて、今尙博く使はれてゐる觀念である。併し仔細に點檢すれば、人間には果して良心とか道德心とか云ふものが先天的に本能的にあるものであらうか。由來本能なる言葉が既に曖昧なもので、人間の社會生活に於て經驗した事が、生物的、或は社會的に遺傳や敎育によりて子孫に持ち傳へられたもので、其本源を衝き止め得ない樣なものを吾等は皆本能だと云つてゐる。然るに、道德心などの發生の歷史を社會學上、又生物學上研究すれば直に分る、良心は社會生活に於ける嘉賞や非難を通して特殊化された心的情態に外ならぬ。此情態は社

會心理作用の傳播（傳染）や、或は同時に多少、生理的遺傳の作用によつても子孫に傳へらるゝこともあらう。兎に角、今日吾等の社會に生れ來る嬰兒には殆んど本能的に道義心が具つてゐるかの如く腦神經（ナレエン）の通路（ヘス）が出來てゐることは慥かである。然し是れが爲に、直にそは道義的本能なりと云ふことは出來ぬ。

若し同じ筆法で、宗教心や宗教本能を見れば、宗教心もやはり社會的に發達したもので、生物の根源から宗教心ありしなど見るは空想に過ぎず、況や宗教心の根源として、宇宙に『絶對的自由意志』の存在を假定するなどは、一層大なる空想である。私は斯る一切の空想や假定を廢して、吾等の生物的又は社會的經驗上、宗教とは如何なる特色を持ち、如何なる本質のものなるやを暫く考へて見たいのである。

三　生の欲求と冒險的分子

生物にして生きんとする意志のないものはない。生物とは即ち他物を攝取して、其

有機的情態を繼續しようと努力するものに外ならぬ。之をベヤグソンに云はしむれば、生の衝動（エラン・ヴヒタル）だと云ふかも知れぬ。兎に角、そは如何樣の形を取りて發顯するにもせよ、生んとする意志或は衝動なきものは生物ではない。而して生物は自己のみでは存在の出來ないもので、必ず外物を攝取しなければならぬ。されば生物が其還境にある外物に向つて働きかくることは、生物本然の狀態であつた。此單純な事實から出發しなければ、宗教の特質は分るものでないと思ふ。

アミイバが食欲を感じない時は手を四方八方に分岐して匍つてゐるが、空腹を感ずる樣になると、食物になると思ふ物體の方面に對つて匍つて往く。此食物はアミイバが慥に食物として知り切つてゐるものではない、臆說的（ハイポセチカル）のものであるから、彼が之に向つて走り往く運動は一種の信仰である。即ち彼れは、それが我れに適當なる食物ならんと信じて匐ひ往くのである。若し宗教の組成分に冒險的信仰が必要であるとすれば、其根源や實に遠く、此原生動物アミイバにすらありと云はねばならぬ。由來、生

活は冒險である。そは自己ならざる他物の上に働きを及ぼして、漸く生を繼續することが出來るのであるから、外物を一定の方法により如何に取扱ふべきやを知らない間は、冒險的に進まねばならぬ。又、如何に取扱うべきやを完全に知悉することは、どんなに進化した生物にでも不可能であるから、此冒險的分子は生命と其始終を共にし、永久に消滅することはないであらう。

されど意識力の鈍い、まだ自意識の發達してゐない動植物には、生活が一種の冒險であることを感ずる者はないであらう。彼等は只往き當りばつたりに其外界との折衝を處理して往く、只所謂本能的に動いてゐる許りである。蛤が朗かな天氣の日、好い氣になつて、口を開いて其處らに寢轉んでゐる。俄かの物音に驚いて、ぴつたり貝蓋を閉ぢた。さあ、是れで先づ安心だと甲殼の暗黑に潜んでゐる。暫くして海が靜かになつたやうだから、少し計り貝蓋を開けて外を窺いて見ると、こは如何に、飛んでもないこと、笊の中に入れられて、「一山百文」と高札が建つてゐる。こんな悲劇的な生

涯を送る蛤でさへ、自から其悲劇的奇運(アイロニイオブフエート)を意識しないであらう。もつと高等な動物、牛馬や犬猫でさへ斯樣な生の悲劇を感じて、夫れから免れ去らうと自意識的に努力してはゐない。彼等は只本能の命ずるまゝに外物と折衝し、無意識的に其還境とより善き調和を保ち往かんと努力するに外ならぬ。

然るに人間に至りては個性の觀念著しく發展し、其感覺や感情が鋭敏になつた計りでなく、自他を區別する自意識が强烈になると共に、自分と還境との對立を一層深く感知し、如何にせば、より善く自己の生命を維持し、保存し、永續し往くことが出來るかてふ問題は瞬時も彼れの頭から離れ難くなつた。

四　還境の觀念化

人間は其初め、他の獸類と同じく、本能的に外界の事物を取扱つてゐたであらうが、過去の經驗を追憶する知力が出來て以來、勢力の經濟法として外界の事物を觀念化し、

一々事物を取扱はないで、之に代はるべき觀念を取扱つて同樣の結果を得る便法を發明した。例へば、他動物には、食物は唯食ふ時にのみ食物であつて、腹が太い時に彼等に食物はない。然るに人間は食物なる觀念を今現に食ふ食物から引離して考ふることが出來る。翌日食ふ米、來年使ふ麥など、現實に食物でないものを觀念的に食物として取扱ひ、之を保存して置くと云ふ考へを起す。食物が觀念化されたが爲めに人間は饑饉の時に徒に餓死する必要がないことになつた。是れ觀念化の賜である。

斯の如く、人間は其衣食住や、一切の日常事を觀念化し、具體的に取扱ふと共に、觀念的にも取扱ひ、觀念化された事物を言語なる符徵を以て表現し、觀念を他の人々と交換し合ふに至つた。觀念が交換さるゝに至つて、人は諸觀念を秩序立つる必要を感じ、論理や數學の組織を編み出し、之を以て外界の事物を網羅しようと企てた。彼は是によりて、外界との折衝を一層調整することが出來るからである。即ち事物を象徵(シムボライズ)せる觀念の統一は事物其者を統一すると略同樣の結果を生じ、事物を統一すること

によりて、人間は生の悲劇を削減し、其環境と一層善き調和を保つて往くことが出來るからである。

心理學的に觀て、人間は外界の印象を官能的に感覺し、之を總合して知覺となし、知覺を抽象して概念となし、概念を繼ぎ合せて判斷を作り、判斷を並べて三段論法を作る、之を推理と名づく。斯樣な過程を通つて人間は益々其外界を觀念化して往く、即ち觀念的に取扱つて一層よき調和を得んことを求むる。例へば、冬期や雨期の隱れ塲なる木蔭や岩穴などよりも常設の家を建てて是れに住めば、何時雨が降つても、又俄かに寒くなつても、安全な隱れ塲がある樣なもので、家は即ち隱れ塲の觀念化である。

五　非人格的觀念化

人は斯の如くにして其日常生活を觀念化し來り、現今に於ては、觀念が無ければ生

活が出來ない程、宇宙全體を觀念の世界に脱化してしまつた。併し此觀念化に二種の態度がある。一は非人格的、他は人格的態度である。非人格的態度とは、外界を物として取扱ひ、之を因果律の網に曳き掛けて、精確に取扱はうとする自然科學的の態度である。即ち吾等は天文學や氣象學によつて、何時、如何なる天候の激變が起るかを豫見し、之に對する相當の防備をなす。又我等は事物を分解して、物質や物力、原子や電子など、精確に取扱ふことの出來る樣な要素にまで分析し、酸素だの水素だのと明瞭な限界を見出して、何時、如何なる場合に於ても、一定の方法を以て一定の結果を得る爲めに、自由に之を取扱ふことの出來る樣なものとする。

此科學的態度は、外的の事物を數學化して、一定の前件を與ふれば必ずや一定の後件を見出すことが出來る樣なものとするのであるから、人は此科學的方法を用いて、昔から今日まで、絶間なく宇宙や人生を數學化し來つた。先づ天體の運行が數學化されて天文學が出來き、物理や化學も數學的にエキザクト サイエンスとなり、コムト

の如きは歴史や社會學までも『精密科學』たらしめんと努力した。乍併、人間の社會事情は到底數理的科學の方法を以て、其將來を豫見し、其傾向を確知することは出來ぬ。何か其處に不思議、不可知、不精確のものがある。そは敢て社會事情計りでない。一般に宇宙の森羅萬象の運行にも此不可知的な、不規則な部分がある。

茲に於てか、スペンサアは宇宙を可知と不可知に區分し、可知的部分は科學の取扱ふ所で、不可知的部分は宗教の領域だと云つた。然し宇宙を斯の如く區分するは頗る淺薄な遣り方で、實際彼れの可知とするもの亦全然可知ではなく、不可知とするもの亦全然不可知ではない。若し全然不可知のものありとせば、そは唯『不可知』であると云ふことでさへ、吾々人間が知ることは出來ないものであらねばならぬ。何となれば、不可知と云ふこと夫れ自身が、既に、幾分か其可知的なることを示してゐるではない乎。されば、可知不可知は程度の差であつて、性質的のものではない。從つて科學が前者を對象とし、宗教が後者を對象とするなど云ふは、子供らしい考へ方である。

六　人格的態度

吾等は二個の異つた對象を持つてゐるのではなく、寧ろ概括的に二個の異つた態度を以て、外界の事物に接觸する。そは既に述べたる如く、非人格的と人格的と、二樣の態度である。前者を自然科學的と云ひ得べくば、後者は社會科學的であつて、一は記述的で、事實的で、他は規範的で、解釋的である。一は實在觀的で、他は價値觀的である。從來、哲學を以て實在に關する學問とのみ思ひしは間違ひである。自然科學に較ぶれば、哲學は寧ろ大に價値觀的である。哲學は宇宙人生の評價に過ぎぬ。されば、私は哲學を以て寧ろ後者に屬すと觀、そは實在に關するよりも寧ろ價値に關する學問と思ふのである。

人間は、前に云つた通り、外界の事物に對して、精確に原因結果の關係に依り、一定の手段を以て一定の結果を得んとする自然科學的の態度を保つと同時に、宇宙の萬

象に對して、不精確な、併し內的な態度を取り、之を自分と同樣な意志や希望や努力を持てる活動として、人格的、社會的な態度を取る。先方が自分に惡るくすれば、惡るくして戻す、善くすれば、善くして戻す。同樣 "Give and take" の精神を以て、當方から外物に對し好意を以てせば、外界も亦好意を以て吾等を遇するであらうと思ひ、且つ希望する。野蠻人が神前に供物を備うるも、文明人が祈禱を捧ぐるも、同じく "Do ut das" 即ち受けんが爲めに與ふと云ふ相互主義の發現でないものはない。是れ外界に對して、相互的、道義的、社會的、即ち人格的關係を樹立しようと努むるものである。自然科學では、外界を物として取扱はんとするが、今一つの態度では、外界を人格的に取扱ひ、宇宙の萬象を人間化せんとしてゐる。例へば其處に死なる現象がある。自分の死は自覺しないから分るまいが、自分の愛する者の死を當面に觀てゐると假定せよ。誰れか、そは只物質解體の一過程のみ、成る程、面白いものだなあ、と冷靜に物質的觀察を以て滿足することが出來よう？　彼れは唯人間に對して、人格的態度を

取るのみではない、禽獸草木や、無生物にまで、人間的態度を取らねば滿足しない。道端の菫を詠へるゲエテ、野鼠の死を哀めるバアンス、近くば有島氏の『石にひしがれし雜草』は主人公の心的態度が、直に此雜草をヒユマナイズして考へたから同情同感が湧いて出たことを示してゐる。人は生の危機（クライシス）に逢つて其不思議な事變をヒユマナイズ又は人格化せずには居られぬ。地震がすれば地震の魚が居ないかと思ふ。暴風が荒れ廻ると風の神の蠻行を恨みたくなる。之れは人間の弱點だと云ふかも知れぬ。併し此弱點は事實だから仕方がない。吾等は我が愛する者の死は之を單に物質の解體として看過し得ないから仕方がない。誰れも一度は逢ふ死の前に立つて、眞面目に考へて見るがよい、直に科學的非人格的態度では滿足し得ないことが分るであらう。

吾等が外界の事物に對して人格的態度を取るは事實である。萬象の關係を統一し、其間に存する意義を見出さんとする解釋的態度によりて哲學は生れ、萬物に對して美醜好惡の價値觀を起す時に藝術は生れ、萬物を規律して、標準を立て、之に據りて生

活せんとする規範的態度によりて道德は出來た。是れ皆吾等の宇宙に對する人格的態度の異なりたる方面であつて、哲學は宇宙を知的に統一せんとし、藝術は情的に宇宙を美化せんとし、道義は意的に宇宙を善化せんと努力する。宗教は即ち、是等三方面を一層統一して、全人的に宇宙の總體に對し、眞善美の在ゆる方面から、綜合的に社會的人格關係を調整しようとする努力に外ならぬ。

七　宗教の本質

されば、宗教では、宇宙を總括的に人格的のものだと見なければ、統一された自己の人格が全人的態度を以て宇宙の萬象と社會的人間的關係を結ぶことが出來ぬ。此宗教的態度は主として、藝術に於けると同じく、情的欲求である。人間が他の人間に對して愛を求むるのと同じ態度である。されば、そは情的なれど、社會的關係を主とするが故に、常に道義的態度を抱容してゐる。同時に、宗教は宇宙觀即ち宇宙の知的評

價と離るべからざるものなるが故に、そは哲學をも包含してゐる。世に哲學を以て綜合科學と云ふが、そは科學が與ふる事實を綜合的に統一し批判するものなるが故である。宗敎は尙一歩進んで、主として知情意の各方面から宇宙と人生とを調和せんとする哲學、藝術、道義を綜合した宇宙總全の人格化である。哲學は道義なる實行の方面と關係なく、只宇宙觀、人生觀として成立し得るも、宗敎は然らず。道義を除外して宗敎はあらず。又道義は人間的で、必ずしも全宇宙との關係を包含せず、若し包含すとせば、そは早や道義の域を脫して宗敎となれるもの、宗敎は常に我れと全宇宙との關係を正さんとする努力なるを要す。

宗敎は殊に藝術的である。是れ人間生活の中心が知的意的なるよりも寧ろ情的なるが爲めであらう乎。兎に角に、宗敎の求むる愛は主として情意的のもので、吾等は全宇宙と父子的、朋友的、或は兄弟的相愛の關係に入らんとする努力に於て著しく宗敎の特色を見る。而も宗敎は藝術ではない、藝術以上である。藝術は美を求むれど、宗敎

は聖き美を求む。此聖い情、即ち清淨なる觀念は實に宗敎獨特の、或は少くとも、殊更に宗敎的な言葉であつて、吾等は愛を求むるにも清い愛を求むる、清い愛を渴仰する。是れ宗敎的渴仰であり、且つ其特色である。されば、宗敎に靈化された藝術と所謂藝術の爲めの藝術とは大に其趣きを異にしてゐる。ドウテの『サッフオー』やダヌンチオの『犧牲』などを讀めば直に分る。ドストイフスキイの『罪と罰』に於けるラスコリニコフの心理的描寫は驚くべき精細を極めたもので、心理學を學びたくば其敎科書を讀んだよりも、ドストイフスキイを讀めと云はれてゐる程である。されど、宗敎的色彩の弱いドストイフスキイはトルストイの『復活』やユウゴオの『噫無情』見た樣な偉大な文學を作ることは出來ぬ。是れ清いと云ふ宗敎的觀念に醇化されてゐないからである。ダヌンチオのフランチエスカとパウロの戀はテニズンのギネヴヒヤとランスロットに好く似てゐるが、アーサア王の偉大なる清い美しい人格を以て結論を着けたテニズンと、唯だ邪淫の悲劇を描いたダヌンチオとは到底同日のものではない。

所詮藝術も宗教に靈化されねば未だ其堂奥に達したものと云ふことは出來ぬ。

處で、宗教は非人格的科學的態度に對する人格的人間的態度の綜合であつて、全宇宙に對して清い美はしい社會的相愛の關係を求むる態度に外ならぬ。されば、宗教の特質とすべは、其綜合的全人的なる對宇宙の人格的態度であつて、宇宙と人との人格的關係を清い愛の關係とし、是れを根據として、凡ての社會關係、自然關係を清愛化せんとする努力に外ならぬ。宇宙的清愛、私は唯此五字に宗教の特質を最も短的に表現することが出來ると思ふ。

八　結　論

生の進化は先づ外界を觀念化して、其冒險的生涯に秩序あらしめ、之を自分の意志で自由に制御(コントロール)して往くことが出來るように努力した。此觀念化は自意識の發展と共に、やがて二個の傾向を生じ、一は科學的に原因結果の網を以て萬物を捉へんとする傾向

となり、他は人格的に吾等と萬物との關係を內的に相愛の趣味を以て概括的に律して往かうとする。一は宇宙の物質化となり、他は宇宙の人格化となつて發現してゐる。此二個の傾向は宇宙の活事實であつて、何れを正とし、孰れを非とすることは出來ぬ。又往々兩者は互に入り亂れて人生の中に働いてゐる。若し宇宙の人格化を人間的作爲だとして排斥するならば、宇宙の物質化も同樣人間の作つたものなるが故に、同樣に排斥しなければならぬ。只其何れが人生に屈竟の滿足を與ふるかと云ふと、人間は自分を只物として取扱ふことを好まず、又唯だ個性(インディヴィデュアル)としてのみ取扱ふのでも滿足せず、人格(パアソナリティ)として取扱ひ、且つ益々自己の人格化に向つて努力する傾向を有するが故に、結局、宇宙の人格化を以てするにあらざれば、深い强い心情の滿足を得ることは出來ないのである。少くとも、外界を人格化しなければ滿足し得ない樣に進化し來つたのである。

宇宙の根元に絕對的自由意志とか、獨一の人格とか云ふものがあるかないかは、我

等人間の知り得る處ではない。吾等は宇宙を人格化すると共に、之によつて自己を一層人格化する。而して無限に人格の向上完成に對する努力が人生に現存する事實を慥め得れば、夫れで足れるのである。神は即ち宇宙的なる吾等の人格的向上の活事實に活現する靈力に外ならぬ。

民本主義の宗教

一　社會生活と宗教の改造

神の本體や實在如何の問題は別として、古來、宗教が社會生活經驗の樣相を背景とし、日常生活の言葉を以て表現され、それが時代の要求に應じて不絶變遷し來つたことは事實である。例へば社會生活に國王ありしユデヤ教ではヤアヴエ神を王として崇拜し、國家の政治をなす貴族及び大臣ありし如く、祭司及び祭司の長があつた。降つてロオマ帝國の時代に於ては、神は罪の審判者たる皇帝の如く、其代表者と稱せられしロオマ法王があつた。近世に至り憲法政治が盛なるに從ひ、國王が憲法を制定して自分の權限を定むる如く、神も自然法を制定して是れに從つて行動し給ふ如く見る所謂自然神教の神が稱へられた。十九世紀に於ては人間の自由意志に對する神の自己制(セルフリミテエ)

限(ション)の思想が現はれ、法王の權力は削がれたけれど、尙僧侶階級が殘つてゐる如く、英國のやうな民本的憲政國に於いても貴族の面影を存してゐる。

斯く云へば、宗敎は常に社會經驗に隷屬したもので、社會を指導するのでなく、社會に指導されてゐるやうに見えるかも知れぬが、一體宗敎は少くとも其表現に於て常に社會生活の理想化されたものであつて、而も飜つて常に社會生活を指導し來つたものである。理想は現實の粹を拔いて未來に投影したもので、云はば一個の影に過ぎないのであるが、而も其影は現實を支配し、影なる理想自身を實在化する點に於て理想は力である、實在である。宗敎の表現も現實の理想化されたものとして、現實を指導する理想の世界を描き出すべきものなるが故に、時代〳〵の要求に應じて宗敎的理想の進化發展すべきは勿論であるが、そは現實を指導する理想として常に現實に觸れて而も現實を超越したものであらねばならぬ。」

今や歐洲の大戰が收つて、世界萬國の社會生活を改造すべき機運に蒞んでゐる。否

な、世界は着々として改造されつゝある。而して其改造の根本原理は民本的人道主義、乃至世界同胞主義である。世界は今や國境を超越した同胞主義の下に軍備は全廢され、官僚政治、富豪政治、男性本位主義は廢たれて、眞の民本政治、智慧政治、男女平等の平民主義が行はれなければならぬ時代となつた。斯る原理の上に立つ社會生活はイエスの宗敎に包含され暗示されてゐる所であるが、過去二千年間に於けるクリスト敎の理想は妥協に妥協を重ねて現世に降るか、或は超然彼世的世界に勇退するかして、現實を指導する力を失つてゐたのである。「若しイエスの兄弟主義が歐洲人の理想を眞に指導して居つたならば、今度の大戰爭は起り得なかつた筈である。其起つた事實から見れば、從來の宗敎が既に時代の要求に適せぬ、時代の理想と緣遠くて、之を指導することが出來ない程生命なきものとなつてゐることを示すものではない乎。

宗敎は時代の要求に適應せねばならぬが、そは妥協の爲めではなく、時代の生活を指導せんが爲めである。されば宗敎は常に其時代に於て最も高尙なる、而も實現可能

なる理想を擁立せねばならぬ。即ち民本主義の現代に於ては、宗教をして最も民本的なものたらしめて、社會生活に於ける遲々たる民本思想及其實行を常に鞭打し督勵し指導せねばならぬ。それが爲めには傳來の宗教が貴族的、帝王的、軍國主義的、慈善主義的なるを排して、平民的、民本的人格主義の宗教に改造せねばならぬ。

二　僧侶無用論

昔の宗教には僧侶や祭司が必要であつた。それは僧侶や祭司の起原を詮ぬれば直に分る。彼等は神と人間との仲介者となつて、神の恩惠を人間に取次いでやる役目であつた。彼等は神を取扱ふ一種特別な技術を知つてゐるので、平民は彼等に依つて神の恩寵に預らんとしたことが、僧侶階級と云ふ分業の起原であつて、今日吾等は凡ての仲介者を排して直接に神に近かんとするものであるから、僧侶階級の無用なるは勿論、牧師傳道師などゝと云つて宗教の事を職業とする者の必要はないのである。然り、民

本主義の宗教は牧師や僧侶を必要としない。彼等は宗教上の貴族であつて、彼等が實際生活を遠ざかつた僧侶や牧師としての特殊の生活は彼等をして吾等平民の生活と沒交渉ならしめた。從つて彼等の説教は吾等平民の思想感情と何等共鳴する所なき單なる言葉に過ぎない。ボロニヤスがハムレットの讀んでゐる書物を窺き込んで何を御讀みなされますと問ふと、『言葉だ言葉だ』とハムレットは答へた。ハムレットの苦悶がボロニヤスなどに分るものか、そは只言葉に過ぎない。然り、當今多くの牧師や僧侶の説教は吾等の眞劍な實生活と沒交渉な言葉に過ぎないものが多い、是れ畢竟彼等が平民の生活と離れた生活をしてゐるからである。彼等は牧師や僧侶として特別の取扱ひを受くるだけ、夫れだけ平民生活から遠ざかつてゐる、從つてほんとうの生活を味ふことが出來ないでゐる。憐むべきは炭坑の坑夫や泥溝の浚渫人夫ではない、人間の實生活に觸れることが出來ないほど人間から祭り上げられてゐる僧侶や牧師である。殊に日本の僧侶や神官は社寺附の財産や他人の喜捨に衣食してゐるから、彼等に人生

の眞味が分らう筈はない。若し牧師や僧侶にして眞に民衆を指導しようと思ふならば、彼等も民衆の一人として普通の職業生活を送らねばならぬ。

私は民本的宗教の要求として先づ僧侶や牧師の階級を打破し、彼等が説教を以て職業とし、之によりて衣食すると云ふ從來の風習を改めなければ宗教は生きて來ないと思ふ。宗教に携はる凡ての人々をして平人たらしめよ、大工、左官、商人、官吏、學校教師、又は農夫や、勞働者たらしめよ。若し然らば、彼等が平人としての宗教的經驗を語る一言は、僧侶や牧師を職業とせる人々の萬言に優りて吾等の實生活に有効なる教訓となるであらう。吾等は神の前に萬人等しく同胞兄弟である。僧侶や牧師のみ神様のことに就いて特別な經驗を持ち、特別な知識を持つてゐる筈はない。高い美はしい經驗を持ち之を有効に他の同胞兄弟に傳へ得る者は、皆夫れ僧侶である牧師である。何ぞ之を一部少數の人々の職業とする必要あらんや。此意味に於てクエーカアの信者等が原則として牧師の必要を認めず、神のインスピレエションに接したものが、誰

れでも構はず、男でも女でも立つて自分の感想を述ぶると云ふ、此態度は私の所謂宗教上の民本主義であつて、此點に於て我等がクエーカアに學ぶべき所甚だ多いのである。

三　罪惡觀と救拯觀の改造

昔の宗教は人間を罪に汚れた墮落したものと思つてゐた。中世紀の原罪説などがまだクリスト教の一部に殘つてゐて、動もすれば人間自身を罪の子と稱し、恰も難破船の乘客が助け船を求むるが如く號叫する。是れは間違ひである。勿論吾等は人間の罪を認むる。然し、それは吾等が罪を犯して高い所から墮落したこと許りではなく、愛を以て低い處から絶えず努力して向上すべきものを努力しないで停滯してゐることが多く、それが却て罪である。罪は即ち無愛であつて、愛とは積極的に献身的の努力を捧げて社會に奉仕し、之によつて自分の人格を完成し往くことである。換言すれば吾

等の所謂罪とは少くとも、或る理想標準を踏みはづして墮落したこと許りでなく、日々の生活に於て彌益高き理想標準に向つて積極的に努力しないことである。人間は動物的生活を後に脱き去つて、徐々生活に昇つて往かねばならぬ。此進化の過程を辿らないで躊躇し逡巡してゐることが既に罪である。

斯る意味に於ての罪は吾等の日々感ずる所である。吾等が偉大な人格を築き、清き美はしき愛の生活をなさんと努力すればする程、我等自身に對する不足不滿を感じて、此罪を滅さんと希ふ。乍併、我等は最早獨裁專制の神が慈善的に救ひを與へ給ふなど云ふことを信ずることは出來ない。今後の宗敎には此救ひとか、衆生濟度とか云ふ考へを許さない。此等の思想は昔し專制君主の時代の遺物である。吾等は神の慈悲や情で救つて貰ふことを屑しとしない。慈悲なる言葉は人間が自からを神の奴隷とか僕(しもべ)とか云つた中世紀の舊思想に屬するもので、佛敎の慈悲もクリスト敎のマアシイも階級思想の所產である。慈悲とは貴族階級の人が奴隷階級の人に所謂憐みを施す慈善主義

であつて、吾等は最早他人から惠んで貰ふ慈善を要求しないやうに、只神樣から慈善的に救の恩寵に預ることを嬉しがるものではない。

神は慈悲ではない。愛である。愛は平等である對等である。吾等は神を愛せずして神からのみ愛を求めはしない。中世紀の思想には先行(プレヴェニエント)の恩寵(グレエス)なるものありて、我等が神を求むる前、神樣の方から既に恩寵を垂れて吾等を救ひ給ふと。若しさうだとすれば、そは誠に都合のよいことである。當方から求めないでも、先方から來て下さる、難有いに極まつてゐる。何の努力なく、何の奮鬪なく、袖手傍觀して救ひに預り得るならば、夫れは牡丹餅に棚である。然し、斯樣に神樣からの慈善的恩惠のみを求めてゐたから、ニイチエなどがクリスト敎を奴隷道德と罵倒したのである。我等は神樣から計り愛を求むるのではない、我等は先づ吾等が生活の理想して神を愛して而して後に神樣の恩寵に預つた方が遙がに心地よいのである。故に私は中世紀の思想に反して後行(エピヴェニエント)の恩寵(グレエス)を主張する。少くとも、吾等が神を愛し得るだけ、同時に、夫れ

だけ神様の恩寵に預りたいと思ふ。西洋の諺に『神は自からを助くる者を助くる』と、是れ民本的宗教の信仰である。昔の宗教は神本的であつた。處で神様から先に人を愛しなければ人は神を愛するに至らぬ様なことを信じてゐた。今の宗教は人本的である、吾等が向上の努力撓みなき處、其所に神様の力が加つて來る。是れ吾等の信條である。

從來の宗教家は叫んで曰く、神様に一切を任せろと。そして自分の重荷が輕くなつたの、安心立命を得たのと喜んでゐた。從來の人間は鋭い知識の光を恐れた、一切を神の恩寵とか安心とか云ふ曖昧なものゝ中に、然り、彼等の所謂神秘の中に包み込んで、分らぬ所に味があると思つてゐた。自分の罪を神に任せて夫れで、肩が輕くなつたなど思ふ連中は、自分の借金を他人に支拂つて貰ふことを喜ぶ人間である。我等の罪障は斯様な手易い信仰や悔悟などに依つて消滅するものではない。吾等が犯したと感ずる罪は何時までも我等の罪であつて、神の萬能を以てするも之を取消すことは出來ぬ。既に發生した罪の事實は罪の事實である。吾等が進んで之を改造するまでは、

即ち之を改造して善化するまでは永久に罪として殘つてゐるであらう。

私は一切を神様に任かせてと、全心全靈を捧げた信頼の美を認むるに躊躇するものではない。然し、自分の罪を一切神様に投げ掛けて、自分から自分に對する責任を誤魔化して初めて安心とか平和とか云ふ難有味を感じてゐるものよりも、トルストイの如く死ぬるまで自己反省の鋭い及で自分を解剖しつゝ常に不退轉の向上的努力を撓まなかつた、其奮闘的生涯の方が如何に慕はしいものであるか分らぬ。安心だの立命などに隨喜の涙を流してゐたのは中世紀に於ける彼世主義の隠遁者である。自分の責任を曖昧にした安心は唾棄に値ひするもの、吾等は常に安心のないことを却て喜んでゐる。我等の求むる所は絶間なき新らしい事業である、修養である。絶間なき自己更改の事業の爲めに我等の心は寧ろ火の車の如く廻つてゐる。何の安心ぞ、何の平和ぞ。

されば、民本的宗教は衆生濟度だの救ひだの云ふ貴族的思想を排斥し、之に換ふるに靈的向上の爲めにする努力奮闘を以てし、先づ神なる人生の理想を愛して同時に神

の愛を受くることを信ずべきである。

四　民本的宇宙觀と神の共働者たる人間

吾等は神に愛を捧げて神の愛を求むる。斯る神は決して九重の奥に龍顔畏れ多くも仰ぎ見ることの出來ないやうな神ではない。神を超然的に宇宙の外に祭り込んで、神の本體を神秘化し、吾等と到底比較することも出來ない、了解することも出來ない、無限、絶對、全智、全能と見るは、人間を奴隷化するものである、又機械化し傀儡化するものである。若し神が萬能なれば、吾等に眞の自由意志はなく、只神の御心の儘になる運命觀に滿足するより外はない。全能者の御意の儘になるのは專制主義の宇宙である。專制的宇宙では、人間が如何に努力しても、又努力しなくても、世界は神の意志の儘にしか動きはしない、そは吾等の預り知る處ではない。ユデヤの宗教や、かのブラウニングのラビ　ベン　エズラに現はれてゐる中世紀の思想では、神は陶工で

人間は陶器、神の御意の儘に吾等は善人にもなり、惡人にもなり、英雄にもなり、馬鹿にもなる、是れ人生を機械視し傀儡視するものである。人生が若し斯樣なものであつたならば、是れほど馬鹿らしいものは他にあるまい。

吾等は個々心靈の自由を要求する、是れ民本的宗教の叫びである。吾等は一個の人間として神の子の自覺に達し、神の友たるを得んことを希ふ。吾等は『三寶の奴』ではない。我等は『神の僕』ではない。我等は自由意志を有する人格である。自由意志は自分以外宇宙の何者からも拘束を受けない獨創力であつて、是れあるが爲めに我等は自分の人格的責任を重んずるのである。若し我等に何者からも拘束を受けない自由がなかつたならば、吾等の人格は根據なき空名のみ。吾等は自分としての生活義を持たないことゝなるのである。

吾等は神から助力を受くると共に、神を助けて彼れの事業を成就せしめ得ることを喜ぶ。受くること計り知つて與ふることを知らないのは慈善院の厄介者である。我等

は宇宙を以て絶間なく進化向上しつゝある神の仕事場だと思ふ、そして我等は神に使役される奴隷でもなく、操られる傀儡でもない。吾等は神の共働者である。神は善美の勇士であり、正義の擁護者であり、博愛の實行者である。而して神は吾等の父であり友であり、靈の指導者である。吾等は彼を友として如何なる惡戰苦闘にも堪へ忍ぶ勇氣を得る。吾等は彼を父として全世界の人類に一視同仁の兄弟的愛を致すことが出來る。吾等は彼を指導者として最も高い理想に憧れ、最も清き美はしき生活に向つて不退轉の精進を續け往くことが出來る。我等は神の子とし友として、神と共に働き神と俱に樂しむことを以て人生無上の法悦と信ずる。吾等に安心あり悦樂ありとせば、そは神と共に働き得ると云ふ確信である。神を無限に愛し、又人を無限に愛し得ると云ふ悦びである。我等が愛人に對する愛も常に苦痛煩悶を伴ふ、而も其處に限り知られぬ愛の悦びがある。吾等の悦びは即ち苦しみ得る悦びある。

五　民本的宗教の適用

上述の如き神觀を有する民本主義の宗教は即ち愛の宗教である。愛は對等なる人格的交渉である。他人を道具視し、機械視し、奴隷視する處に愛はあり得ない。個々人格の獨自無双性を認めて、之を尊重し、互に其肉體的、知的、道義的可能を無限に發展せしむるやう相扶け合ふことが吾等の愛を實行する所以である。

愛の宗教は國境を超越し、民族的區別なく、階級的差等なく、貧富、老苦、賢愚の區別なく、世界十六億の民衆をして各自の個性を磨き、其天職を全ふせしむる爲めに均等の機會を與へんことを主張するものである。生産や分配の問題を處理し、貧富の懸隔を緩和し、又富者に公共心を鼓吹して公益の爲めに彼等の積財を提供せしめたり、貧者や勞働者をして自覺せしめ、單に衣食の爲めに生きず、高尚な精神生活の實現の爲めに努力せんことを鼓舞したりする、是れ皆愛の宗教の要求である。

愛の宗教は軍備の全廢を主張する。かの五大强國が中心となつて國際聯盟を結び、武備を以て世界の平和を維持せんなど云ふが如きは、一種の國際的貴族主義の寡頭政治を稱ふるものでゐつて、民本主義の宗教的理想を距ること甚だ遠いものである。我等はウイルソンやロイドヂョーヂやクレマンソォを我等の民本的宗教に來らしめ、彼等を啓發し、彼等の理想を高からしめて、直に民本的世界共和國を實現せしめねばならぬ。米國が海軍擴張をやつたり、英國が制海權を棄てないなど主張したり、又嘗て民族自決主義を主張しながら、自國の領土には是れを適用しないなど勝手がましいことを云つてゐる彼等は、實に民本主義も何も解しない、やはり國家至上主義の迷夢に囚はれてゐる奴等である。

世界改造の秋に當り、げに今日の如く、我等が稱ふる民本的愛の宗教の必要なことは他に在り得ないのである。

祖先崇拜と神社佛閣の廣告的利用

一　表面的日本

文展の繪畫彫刻など一瞥すると、殆んど皆其表現が或る典型に囚はれて、表面的或は平面的なもの計り、少しも內面的な立體的な表現が見當らぬ。緻巧の纖細、色彩の艶麗は有之も豪宕雄渾又深邃幽玄の趣きあるもの全くなしと云つてよからう。時代の藝術は所詮時代の國民性しか表現することは出來ない。日本國民が表面的で平面的で、どうして藝術家に奧行のある內面的な作品を要求することが出來よう。然り、日本人は皮相的である。少くとも現代の風潮は一層表面的になりつゝある樣である。彼等は東洋の文明を神秘的だの靈的だのと威張り、西洋文明を物質文明だの、現金主義だの拜金的だなどゝ嘲笑し來つた。併し、事實は全く反對で、世界の文明國中日本人ほど

現金主義で物質的で表面的な國民はないであらう。

日用の交際振りに於て、進物の遣り取りとか、知人の送迎とか、婚禮其他の祝ひ事などに虚飾虚禮多く、遠くまで見送りに往けば自分の大事な業務に差支へるので厭なのにも拘らず、義理づくに見送りに往つたり、ない袖を振りちぎつてまで盆節季の進物を送つたりする樣なことは勿論僞善であるけれど、茲には其方面の考察を略し、日本人が最も眞面目なるべき、又眞劍に其心事を飾りなく吐露し表現すべき宗教の事に就て、如何に物質的現金的表面的なるかを見て誰れか憤慨しないものがあらう。

二　祖先崇拜の墮落

日本人は祖先を崇敬すると云ふ。成る程、祖先を大事にすることは甚だよいことである。乍併、祖先崇拜をしないとて常に日本人が非難してゐる西洋人と何れが眞に祖先を大事にしてゐるかは、彼我其墓地を比較對照して見れば直に分る。日本の神道は

民族的宗教であり、皇室は國民の宗家として祖先崇拜の中心となつてゐる。佛教も此民族的宗教に一歩を讓つて夫れ自身民族化して了つた。處で、佛教の如き世界的宗教も日本では『王は十善、神は九善』の諺に洩れず、時に聖武天皇の如く自から『三寶の奴』と稱して佛門に頭を下げた王者がなかつたではないが、大體に於て外來の宗教は如何にそが世界的なるに拘らず、王門によりて代表されたる神道に隷屬せざるを得なかつたほど、祖先崇拜が强烈なる日本的宗教意識となつて現はれてゐたのである。されば我が日本に於ては祖先崇拜が純朴な渴仰の誠となつて表現されて居るべき筈なのに、事實は全く反對である。日本の墓塲は恰も塵溜の樣に汚たなく、塲所も多くは寂寞邊陲、訪ふ者をして鬼氣に襲はるゝを感ぜざらしむる能はぬ。日本人にして『墓塲』と云ふことゝ『汚れ』と云ふことを聯想しないものは一人もあるまい。墓塲に入ることは厭やな淋しいこと、何か自分に墓塲の汚れがくつつきはすまいかと思はしむる。墓塲を如斯氣味惡るき塲所、居心地惡るき塲所たらしめしものは、畢竟日本人が

眞に祖先を大事にする道を知らぬからである。そは彼等の宗教心が表面的で、祖先の人々に對して靈的の親しみと渴仰を缺いてゐるからである。

クリスト教國では死者の靈は天國に行くのだと信じてゐるから、墓場などどんなにして置いてもよささうなものであるが、彼等が死者の靈を尊重することは直に彼等の亡骸を尊重する心となり、其墓場を大事にしてゐることは遠く日本人の及ぶ所ではない。西洋の墓場は宛然たる公園で、花咲き鳥歌ふ清淨な場所である。墓場は死者の靈を慕い德を回想する場所である。墓場にはベンチなど備付ありて、家人相率ひ、辨當など持つて來て、半日を死者の墓邊に送り、古き思出でなど語り合ふことは決して珍しくはない。我等は西洋の墓場に入りて決して鬼氣に襲はるゝ樣なことはない。公園に入るのと殆んど大差なしである。日本の神道ではクリスト教と同樣死者の上天或は神靈化を信じながら、矢張り墓場に對する親しみを感せしめ得ない。

又西洋人は死は死として飾りなく之を表現せんが爲めに葬式などに死の色なる黑色

を用ゆるが、日本人は反對に葬式に白衣を着る、是れ何の意味であるか分らぬ。愛する者の葬式に臨む當面の悲しみを掩ひ隱さんとて、光明と純潔とに晴れやかな色彩なる白色を用ゆるのだとすれば理由ないでもあるまいが、墓場を暗黑の巷に化せしめてゐる日本人の心理狀態として、其葬式の當時のみ光明ある靈的のものたらしめんとするは謂はれないことである。寧ろ西洋人の如く率直に悲哀を悲哀とし、暗黑の涙を暗黑の色を以て表現することが正直な眞情の發露ではない乎、又一旦墓場に送りたる以上は、其處に一層淸き靈的の省察を試み、死者の靈が久遠に墓場の土と化するのではなく、墓場は只故人を追想する機會を與ふる場所として、此處を陰欝の林間に埋沒せず、成べく晴れやかな心地よさ場所たらしめ、故人の光明の方面、善良の方面のみを追想する樣にすることが、我等の內的要求を卒直に表現したものとして、寧ろ適當な處置だと思ふ。約言するに、日本人が葬式に白衣を纏ふは僞善である。而して墓場を淋しからしむるは消極的に死者を我等の追慕より遠ざからしめ、却て其德を歎美する

機會を失はしむるものであつて、決して祖先崇拜の道に叶ふたものではないと云はねばならぬ。

三　葬式の虚禮と廣告的行列

以上の事柄にも增して一層日本人の表面的な僞善を表白せるものは、葬式の虚禮虚飾に富んでゐることである。私は昨日須田町を電車で通過する時、豪家の葬式に出逢つた。數百の花、而も多くは造り花を各一個宛の人夫に持たせ行列を造つて通る、其次に數十の放鳥の籠が來る。又其他色々な葬式の贈物を親族や友人から貰つたのが麗々しく掲げられて持ち運ばるゝ。故人の靈を送る爲めに造花を使用するは如何にもアーチフヒシャルで、殊に其放鳥なる鳩は何の意味であるか、さつぱり分らぬ。肉に囚はれてゐた靈の解放を象徴する爲めに、籠に捕はれてゐる鳩を放つことは如何にも意味ありげであるが、其實、是等の鳩は皆葬儀社に飛び還つて了ふのじやさうであるか

ら、彼等は決して解放されたのではない、只葬式の行列に加はつたに過ぎない。

斯く無意識的に動物の會葬を强ゆることが如何に虚飾虚禮であるかは、先づ甚だ咎むべきことでもないとして、見てゐた私をして最も不愉快に感ぜしめたのは其放鳥の籠や、花輪、造花の蓮などに附着したる送與者の名札の餘りに大なるとこであつた。東洋文明は精神的だと云ひ、日本人は自分の德を謙遜して寧ろ之を隱蔽せんと勤むるなど云ふことを幼少時から聞かされてゐた私は、實に異樣な感じに打たれざるを得なかつた。私は思ふた、此葬式は盛んであるが、夫れは花多きが爲めでなく、放鳥多きが爲めではない。夫れは只名札の行列なるが故であると。其證據には電車中の人々が皆其名札のみを讀んで、あれは誰れだ、彼れだ、と評してゐる。察する所、送つた人も其名札を讀まれんが爲めに送つたので、眞に故人に對する禮儀として送つたのではあるまい。甚しきに至つては『何の某』と名前を書いた下邊に『人夫付』と云ふ文句あるを見た。是れは丸るで商品の廣告である。廣告の行列である。

西洋の人も葬送の爲め花輪を送る、夫れは故人の墓を飾らんが爲めである。されば送與者の名前を麗々しく書き示めす樣なことは決してない、只巾半吋、長さ三四吋位の紙片に名が付けあることがある。夫れは花屋から直接に送らすのであるから、『何の誰れから注文を受けて送り屆けたのである』と云ふ意味を表はす爲めに花屋が名前を書き示してゐるに過ぎない。

私は祖先崇拜の日本人が却て崇敬の精神を沒却して、葬送を自己廣告に利用してゐる心事の陋劣を惡まざるを得ない。之を惡むと同時に、日本の宗敎が如何に墮落してゐるかを悲まざる能はぬ。或人が私に『日本に留學せよ』と警戒して呉れた。私は喜んで日本に留學してゐるが、日本の文明を深く觀察すればする程、其低級なることに驚かされる。西洋の文明はクリスト敎の感化の下に發展し來つた。彼の古代文明の研究で有名なクランヂの如きは、祖先崇拜は他の凡ての宗敎を屈服せしめた、佛敎も印度支那日本に於て結局祖先崇拜に併呑されて了つた、併し此祖先崇拜を亡ぼして宇宙

的大靈の精神的な崇拜を世に宣傳したものは獨りクリスト敎であると云つた。併しクリスト敎は祖先崇拜を滅したのではない、併呑したのである。少くとも其福音の本旨に於て、神と人との關係を父子的相愛の情を以て表現せる如く、祖先崇拜の精神は決してクリスト敎によつて除外されたのではなく、寧ろ大成されたのである。『預言や律法』を毀たんが爲めでなく、『之を成就せんが爲めなり』とイエスが云ひし如く、クリスト敎は祖先崇拜の精神を今一層深い意味に於て抱容し盡した。さればこそ、祖先崇拜を棄てしと云ふ西洋人に、却て崇敬の眞が現はれてゐるのである。

彼等は故人を敢て祖先として崇敬しないであらう。否な、祖先なるが故にとて特別に崇敬しないかも知れぬ。乍併、彼等はクリスト敎の根本義によつて、凡ての人を一樣に神の子として、即ち己が兄弟として敬愛する。處で、西洋人は葬式の行列が通ると、他人の葬式で全く自分と無關係な人のであつても、帽子を脫ぎ路傍に立ち止まつて、靈柩の往き過ぐるまで靜肅に敬意を表してゐる。日本人が祖先崇拜者だと自から

標榜せるにも拘らず、見ず知らずの他人の葬式に對しては全く不作法なるには今更驚かざるを得ない。例へば日本人は葬式の行列の中を切斷して通行することを敢て意としない。西洋人は謹愼に其行列の通過し去るまで待つてゐる。

是を以て之を觀るに、人は祖先崇拜などと稱して人間を崇拜し、或は自分の祖先たる人間のみの崇拜を事として、遂には人間すらも眞に崇拜しない樣になる、只廣告に利用するか、否らざれば、我れ關せずと知らぬ振りするに至る。之に反して、超人間的宇宙の大靈に父の如く親しみ近づくものは、近か廻りにある人間即ち我等の『隣人』を一層靈化して靈的に取扱ひ、神を敬する如く、彼等の靈をも尊重するに至る。

四　神社佛閣の墮落

日本人が葬式を廣告に利用するは、祖先崇拜が墮落して無意義となり、今や宗教として何等の價値なきを證明せるものであるが、日本人は神社佛閣の崇敬に於ても等し

く物質的、表面的、外形的であつて、佛教も神道も一般人民の宗教として最早其精神的價値を失つたものと云はなければならぬ。夫れは東京市内の神社佛閣が如何に自己廣告に利用されてゐるかを見れば分る。例へば一寺の入口に街燈がある。其街燈に『信濃屋』とか或は『若葉亭』などゝあるから、商店か料理屋の軒燈かと思つてゐると、夫れは間違で、内には某寺の本堂がきらめいてゐるのである。軒燈に示めされし名は即ち寄附者の名であつて、寺の名ではない、寄附者は寺を利用して自分の屋號を廣告してゐるに過ぎない。又、斯る廣告的寄附を受け取る寺の住職は同樣物質的で、現金主義で、宗教の何たるかを解してゐないことは勿論である。鎌倉や江の島に往くと尙一層此廣告術が盛に行はれ、建長寺の奥の院にある半僧坊など云ふ、嚴かめしき天狗樣で禪の妙機と幽玄の思ひあらしめむべき聖境は全く俗界の俗物に俗化されて、天狗も石佛も、燈籠も手水鉢も、石段も玉垣も皆寄進者の名目の大文字によりて滿たされ、殊に甚しきは魚河岸や料理屋や、所謂『連中』の名前によりて麗々しく飾られてゐる。

人或は云はん、夫れは寄附者が俗物なるが故に神聖なるべき寺院の殿堂を廣告に利用したのだと。乍併、斯る俗物の跋扈を寧ろ歡迎してゐる寺院自身が既に業に其宗教的精神と職分を失却して、自から俗物となつてゐるのではない乎。序でに云つて置くが此圓覺寺が建長寺かに日本一の聖僧があるとかにて、或る日客あり、禪の弟子たちんことを求めたと。日ならずして今道心は聖僧が何時も煙草を吹かしてゐるのを見て、『師よ、煙草は衛生上害ありと聞くが、果して如何』と尋ねた處、聖僧曰く『然り』と。『然らばなぜ師は煙草を薫らし給ふか』と詰問せし處、聖僧曰く『いや、是れば かりは止められぬ』と、今道心は『意志の鍛練を誇り、悟道の眞諦に達せしとぞ聞く聖僧にして尙此言あり、何ぞ僞善の甚しきや』と一喝して山を下れりと云ふことである。

佛門や神道が世俗の虛榮や廣告に利用されてゐる計りでなく、之を喜んで歡迎してゐる宗教家によりて充たされてゐるのは既に日本の傳統的宗教の死滅せることを語るものである。而してそは同時に、從來の宗教が生氣を失つて、是れに代るべき新宗教

の到來を期待してゐるのである。

新らしい宗教、然り、來らんとする新宗教とは何なるべき、そは必ずしもクリスト教たるを要しない。そは佛教と稱してゐても、神道と名乘つてゐても差支へない。但しそは下述の如き條件を具有するものでなくてはならぬ。即ち、そは個々人間の社會關係を通うして、人類全體、宇宙全體との關係を正整せんと努力するものでなくてはならぬ。そは我が兄弟、我が祖先、我が國民、我が民族などの如き、或る限られたる人間の社會關係を通り越して、まともに人間生活の根柢なる宇宙全體の精神生活と呼吸相通じ、脈絡相通ずるものであらねばならぬ。そは宇宙の大靈を信じ、それに近づくこと慈父の如く親友の如く人格的で、此大靈と生活の理想を同うし、目的を同うし、趣味や憧憬を同うし、相愛し相慕ふ戀人同士の如き同情同感の間柄にあるものでなくてはならぬ。新郎は新婦の愛の喜びに充たされて、身邊にある凡ての人々に吾か喜びの情を表現し、我が新婦に對する愛を以て隣人を愛す。彼れが新妻を得たるの悅び斯の

如くにして、彼れは眞に愛者たるを得る如く、宇宙の大靈に愛の誠を致す信仰の勇士は、同時に我が肉の兄弟や、我が友達や、我が國民や、我が民族を超えて、一視同仁、全世界の人、全人類、全萬象、全衆生を愛する人たらざるを得ないのである。斯る愛を敎ゆる宗敎は恐らく、何等の殿堂を持たないであらう。何等の儀式を重んじないであらう。そは自己廣告に利用さるべき何等物質的な表現を持たないであらう。斯る宗敎は各自の靈の奥底に燈籠を燈し、玉垣を結へ、神に對し、人に對し、最も淸き最も美はしき愛の誠を以て奉仕せんことのみを日夜祈願し、且つ努力するものである。

願くば我等日本人をして一切の腐敗した、精神なく生命なき宗敎を棄てしめよ、而して更生の氣分豊かに、新らしき靈の宗敎を奉ぜしめよ。人間としての人格的意識を强め、人格的態度を以て萬物に接し、萬物の榮へを致し、之によりて一層己が人格的意識を高め、神に對し人に對し、一層淸く美はしき愛の奉仕にいそしむものたらしめよ。

クリスト敎の眞髓

一　緒論

先づ迷信を打破せよ。イエス即神說の虛妄

クリスト敎は平民主義博愛主義を唱ふと云ふ。然も所謂クリスト敎國に貧民市をなし、無職者群をなすは何が故ぞ。クリスト敎は世界兄弟主義平和主義を訓ゆと云ふ。而もクリスト敎國に國家主義は榮えて戰亂相踵ぎ、人種的偏見の厭はしきものあるは何が故ぞ。是れ畢竟クリスト敎の眞髓がクリスト敎國の民心に徹底してゐないからである。否、クリスト敎の本質が時代の錆に腐れ付いた幾多の迷信に掩はれて、其實を傳ふることが出來ないでゐるからである。天下百萬の敎會、百萬の敎役者が詐りのク

リスト教を眞理と誤認して、臆面もなく公衆に傳へんとしてゐるからである。

然り、現今尙正眞正統のクリスト教なる銘を打つて、教會にて販賣せられ、傳道館にて競賣に附せられてゐる宗教の多くは、史上の人イエスを祭り上げてクリストと稱し、神となし、主と仰ぎ、救世主と戴く狂信家ポオロの宗教であつて、イエス自身が教へ、且つ實行せし福音ではない。聖書に就き聊か歴史的の研究をなさば、事實は甚だ明瞭であるが、之に氣付かずしてポオロ宗を眞のクリスト教と誤認して、建教以來殆ど二千年間、斯くも人心を瞞着してゐたのは、抑も誰れ人の罪であるか。云はずと知れた、信徒自身の罪である。勿論イエスを神とせざれば彼の言行に威嚴が保てない、從て信仰の力を贏ち得ないといふ如き布教上の政略も加つてゐやうが、要するに信徒自身が迷信的宗教を要求してゐたからである。彼等の我儘は自から努力してイエスの教訓を實行し、清き美はしき愛の生涯を送らうとはせず、彼等の罪惡は彼等自身の償ひ得る處にあらずと諦めを付け、是を神自身に打ち任せ、神は其獨子なるクリストを

して十字架の處罰を代受せしめられたから、我等人間は彼の死によりて凡ての罪障より免かるるを得たのである、されば吾等は此所謂史的事實を信ずることによりて「救ひ」に預るといふ誠に難有い他力信心の空想に耽りて、人間の道義的努力を侮蔑し、實際生活の廓清を等閑にして「後生根性」の我欲を逞ふし、アーメン〳〵で天國の旅行券が確保せらるゝものと思うてゐたのである。狂妄も亦甚しいではない乎。

社會一般が斯樣な迷信を要求する間は傳道者も之に隨從して、やたらに難有いお目出度いお話を揑造して民衆の弱點に附け込み、イエスの福音の本光を蔽ふて、ポオロの謬見の上塗りをやつてゐた。彼等は曰く、イエスは人ではない、神である、クリスト（王者の義）である、救世主である。然り、彼は人でないから吾等は彼を眞似ることは出來ない、修養しても彼の人格に近くことは出來ない。彼は十字架的贖罪の爲に現顯した空前絶後の奇蹟である神秘であるから、吾等は只彼を主と仰いで眞の救ひに預るだけのことであると。されば聖書は彼が人にあらずして神なること、或は神の獨

子なりしことを證明せんが爲に如何に事實を抂けてゐることよ。而も見よ、不思議なことには、聖書記者があれ程の狂熱を以てして、尙イエス自身の口を籍りて『我はクリストなり神の子（獨子）なり』と直接に云はしめて居る所は新約全書中一個所も見當らないではない乎。

由來イエスを神とするの迷信は彼の死後、時代の錆と共に發達したことは爭ふべからざる史上の事實である。今試に只一例を擧ぐればイエスの沒後三十年即ち紀元六十年頃に書かれた新約聖書中最古の記錄なるポオロの書翰には、イエス在世中は只の人間であつたが、十字架の苦難を經、三日目に蘇り、昇天してクリスト即ち神となられた樣に書いてあるが、其後數年を經て出來た彼の傳記マコ傳には、イエスは三十才頃預言者ヨハネからヨルダン河で洗禮を受けし時、聖靈（神の靈）鳩の如く下り來りて、茲に初めて神格を得られたと書いてある。尙進んで紀元七十年後に出來たマタイ傳やルカ傳には、彼は處女マリヤと聖靈（神）との合ひの子であつて、既に生れた時から

神格であつたと書いてある。然るに其後十年許後から紀元百年頃迄に出來上つたヨハネ傳には、イエスは降誕以前、既に業に宇宙の太初から神（クリスト）であつたと云ひてクリストの先在說を稱へてゐる。紀元六十年頃に書かれたポオロの書翰がイエスの實生涯に關して何程の事も云つてゐないのは當時未だイエスを神化した傳說が出來てゐなかつたのと、ポオロ自身が史上のイエスに餘り興味を感ぜず、只夢幻的な復活後のクリストにのみ主として宗敎上の價値を認めてゐたからである。肉體的復活に信仰の土臺を据えたポオロの迷信に就ては之を後に讓り、次項には先づ聖書の劈頭第一にある處女降誕說の迷妄を指摘して世の注意を促したいのである。

私が之を爲すは、敢て破壞を事とするのではない。そは福音の眞諦がイエス即神說や、處女降誕說や、十字架贖罪說や復活說の如き栗の毬に包まれ、世界最良の寶庫なる聖書は今日の新敎育を受けし靑年諸君の一讀だに値せぬものとして卻けられてゐるからである。そは父祖傳來敎會內に育ちし者も是等の傳說が餘りに馬鹿氣てゐること

を發覺して、殼と共に正味迄も擲つ者甚だ少くないからである。されば私は聖書記者の迷信を迷信として退け、久遠の眞理を語れるイエスの教訓と、彼が古今獨歩の偉人格とを共ともに膽仰せしめんが爲に、先づ迷信打破の叫びを擧げ、最後にイエスの純福音を略述する積りである。

二　家柄の誇と處女降誕

宇宙の進化、醜惡の善美化

聖書は世界最大の文學である。殊に新約聖書中最初の四卷はイエスの宗教的生涯を描ける唯一の良書として、何人も讀むべき大文學である。然るに世人はセキスピヤやミルトンやダンテやゲエテを好んで讀むが、彼等に優ること萬々なる四福音書をなぜ愛讀しないのであらうか。其理由の一つは多分そがクリスト教の經典として、從來何んだか秘密の文書であるかの如く思はれてゐたからである。聖書は特別の書ではない、

人間の書いた文字である。人間の最も眞面目な高尚な生活の經驗を味はんとする者は先づ來りてイエスの福音書を熟讀且つ體讀すべきである。

而もイエスの歿後數十年後に出來上つた傳說の記錄である聖書には、人間活社會の事實と自然の常相に相反する記事が幾らもある。そは凡てイエスの人格を崇敬するの餘り不知不識の間に成立つた信仰の所產であるから、其處に注意して讀まば何の躓くこともなく、人間生活の大眞理に堀當てゝ、生命の淸泉沸々たるものあるを味ふことが出來るのであるけれども、新約聖書の第一頁を開けば、直ちに自家撞着の記事があるので、事情を知らぬ人は何人も躊躇して先きまで讀み續けようとしないのである。されど其他の凡ての不自然な記事は、既にマタイ傳の過半を讀みたる人には、其偉大なる宗教的、道義的觀念の妙音に打たれて、最早何等の躓きとはならぬことと信ずるが故に、之を措いて問はず、茲には只福音書劈頭第一に來る荒唐無稽の處女降誕說の由來を述べ、初めて聖書を讀まんとする人々の失望せざらんことを豫め警戒し置くの

である。

新約聖書は劈頭第一にイエスの父方の家系を辿り、父なるヨセフはユデヤ人の祖先として最も尊敬せるアブラハムの直系に出でたりとして、其家柄の誇りを示してゐる。而も直に前言を飜へして、イエスはヨセフの實子にあらず、ヨセフの許嫁の處女マリヤと聖靈（神）の合ひの子なりと云ひて自家撞着に陷つてゐる。イエス若しヨセフの實子ならざりせば、何が爲にヨセフの家系を辿るの必要ありや、是れ何人も際會すべき第一の疑問である。

由來高等動物、殊に人間には兩性の交通によらざれば受胎の事實なきこと拒絶し難き科學上の眞理である。若しイエスの場合にのみ例外なりしとせば、そは聖母マリヤを下等動物、譬へば處女生殖を事とする蜜蜂の類と同視するのである。若し之に反して、そは兩性の交渉によれるも、此場合彼は神の男性と人の女性との雜種兒であつたとするならば、イエスは件（くだん）の如き一種の怪物であらねばならぬ。若し然らずして人間

的に彼はヨセフの子ではないが、或る他の男の子なりしとせば、イエスは世の所謂一の私生兒であらねばならぬ。されど斯の如き偉大な靈覺の人が私生兒中より出づることは殆ど不可能である。母の心に深く刻まれし非行の惡感化は不知不識の間に其子の敎育に及び、到底大人物を育て上ぐることは殆んど不可能事であらう。然るにも拘らず、若しイエスが私生兒にして、斯の如き宗敎的大人格を發輝せしとせば、彼が遺傳や社會環境の惡影響に逆つて戰ひし靈的奮鬪の如何計り激烈なりしかを想像して、吾等は一層彼れの人格を崇敬すべきである。

昔の人は宇宙進化の事實を侮蔑し、或は此大事實を會得せず、偉人は皆由緒ある家、或は超人間的手段によりてのみ生るゝものと思うてゐた。日本人が萬世一系の皇統を自慢し、又は我が家柄に誇を感ずると同じく、舊式の社會には何れの國にも在觸れた感想である。今や宇宙進化の事實は認められて、自然にも人生にも、小より大に、醜より美に、惡より善に進化するの事實がなければ、宇宙の大生命に創造的活動の意義

はないものとせらるるに至つた。然り、我等は己がじゝ花の姿の美はしく、月の面影の清けきを賞し、生れながらにして善美の性格を有する人々を愛慕する、之れ人間の通性である。イエスをして單に生れながらの聖人とせしのみならず、聖靈の子、アブラハムの子孫なりとせし所以は實に茲にある。されど吾等は人生進化の事實に照して、善が始めから善なるよりも、寧ろ惡が進化して善となりし事實を一層尊重する者である、吾等は醜惡、不完全の人格が靈的奮鬪により層一層偉大なる善美なる完全の人格に進み往く、鍛ひに鍛へ上げた品性の光輝を一層愛慕し、尊重する者である。」水が酒となるは眞の奇蹟ではない。されど惡人が善人なとり、罪人が愛者となるは事實あり得る最も神秘的な進化の奇蹟である。

されば讀者よ、我等はイエスが大工ヨセフの子であらうと、聖靈の賜であらうと、王家の出であらうと、私生子であらうと、そんな事には一切頓着なく、只彼が常に絶大の理想に對つて憧れ、父なる神に熱誠の祈禱を捧げ、常に努力し奮鬪せる靈的修養

の人なりしを聖書に就いて學び、彼が經驗せし清き美はしき愛の生涯を如實に我等自身の生涯に體讀し得んことを常に心掛けねばならぬ。

三　イエスの時代とユデヤ教

彼の福音と現代の要求

イエスは三十歳前後にして豫言者ヨハネの弟子となり、其師の衣鉢を傳へて、初めの間は言葉迄も師と同一轍に出で、『悔ひ改めよ、天國は近づけり』と野に叫んでゐた。そは時代の空想なりし世界最終の日近きにありて、此日至らば神は最後の審判を下し、人を善惡の二筋道に分ち、惡者は地獄の火に燒き、善人は天國に入らしめ給ふとの信念より、罪人の悔改を促した言葉である。併しイエスは何時までも師の口吻を眞似る者ではなかつた。彼れの思想、信仰に獨特の進歩ありしは、僅の年月間に於ける傳道

中にもよく顯はれて居る。其一例を示せば、彼は豫言者ヨハネと共に天國の外來を出發點とせしも、後日『天國は汝等の內(間)にあり』と云ひて、其精神的內在を說いた。是れ極樂も地獄も皆吾等自身の心の淸濁により自から受くる良心の喜悅或は苛責の問題であることを喝破したものである。斯くて時代が物質的に解釋せる天國の意義に靈的深奧を加へたこと蓋し幾何であつたであらう乎。

されど彼は充分に彼れの思想を鍛練し老熟せしめて、深く〳〵彼れの福音を當時の民心に刻み込むことが出來ない內に、早くも十字架の最後を餘儀なくせられた。彼が巡回傳道の事業は僅か二年足らずの歲月中に挫折してしまつた。さはれ其來ること遲く、其去ること速かなりし彼が彗星的生涯の內に萬代不磨の眞理が燦然として閃いてゐる。然り、彼れの生涯と福音とは十字架の最後と共に朽ち果つべきものではなかつた。そは誠に人類社會の最高模範として、精神生活の最高理想を表現せるものとして、永へに吾等が靈的生涯を指導するものたるは些の疑ひなき所である。

されど今、斯の如き理想、斯の如き生涯を以てして、尙世の容るゝ所とならざりし彼れの福音の要諦を述べんには、先づ彼れの敎が如何に時代を超越したもので、且つ何故に時代精神と扞格衝突せざるを得なかつたかを知らねばならぬ。イエスは一般的に靈の病理を說いたのではない。二千年前のユデヤ民族の靈的病患を癒すには是れでなくてはならぬと、特殊の場合に彼が生命の原理を適用したものに過ぎないから、吾等今歸納的に此特殊の場合から彼れの根本原理に溯らんとせば、先づ同時代のユデヤ敎の狀態、即ちユデヤ人の靈的病患を伺はねばならぬ。

紀元前數世紀前に現はれた預言者(靈的指導者)等は常に神の恩寵と慈悲を說き、人は神に信賴し、心を淸うし、靈の奧底に叫ぶ神の聲に隨うて行動すべきを訓へて居た。が同時に、斯樣な場合には斯樣にせよとて、特殊の道義的行爲を例解して國民を敎導した。偉大な預言者が引續いて顯はれた時代には、事件の發生と共に吾々が如何なる行動を取るべきやは、一々彼れの靈感によりて判斷され、場合〳〵の要求に應ず

ることが出來たけれども、祖國の滅亡と共に大預言者は跡を絶ち、紀元前五世紀頃に於ける國家再興の運動は國家主義の鼓吹となり、國憲の必要は過去に於ける豫言者の訓戒及び道義的行爲の實例を以て直に法典となし、神の言と信じ、人は此等の法規に從つて行動せば、皆夫れ神の前に義とせらるゝのであると思ふに至つた。今や塲合塲合に應じて一々神の御旨を伺ふ必要はない、神は其御意を悉くモオゼの律法や豫言書によりて示顯されてゐるから、夫れによりて判斷をすれば間違ひないと思うたのである。されど時代の變遷は新しき事件の發生を避くることは出來ないから、彼等は新事相の發生と共に新規律の必要を感じたが、過去の法典に絶對の價値を認めし彼等は只此法典の意義を布演して、日々起り來る凡ての新經驗をも網羅しようと試みた。處で從來の金科玉條たりし法律の書に幾多莫大の解釋書が出來た。そは僧侶や學者の事業であつて、彼等が瑣末に亘つた學說や判決例は神の言と同樣の威力を以て民心に蔭ん

だのである。

斯て神と人との關係は益々遠かり、人は單純に卒直に神の聲、良心の聲を聞くことの代りに、繁文褥禮な法律の外的命令を拳々服膺し、日々の行爲の些末に至るまで悉く道德律の細則によりて縛り上げられ、任意と自由の潑溂なる靈氣を失ひ、善事美事の外形や枝葉に拘泥して、愛や正義や平和や謙遜の大精神を等閑にし、律法の細則と形式に違反しない限り我は善人なり義人なりとして滿足し、尙も一層善美の理想に憧れて一層完備の人格を修養せんとするが如き內的の衝動を失却してしまつた。斯くて預言者の精神は衰へ、國民の元氣は沮喪し、徒に外的の救濟と奇蹟的の復興をのみ祈求してゐたのである。

外律的道德の細則に拘束されて內律的道義の自由を失ひしは單に二千年前のユデヤ人のみではなかつた。見よ、近く十九世紀の文明が如何に國家主義で、而して形式的、物質的、法律的なりしかを。其餘波は廿世紀に入りても尙止ます、國家は何もかも律法的にくゝり上げんとしてゐる。勞働時間の短縮、又法律。女權の擴張、又法律。外

國人の排斥、又法律。嗚呼何んと法律萬能の世なることよ。而して又何んと法律學生の多いことよ。金さへ出せば如何樣にも法網を潜る道を敎へて呉れる辯護士多く、國法の名の下に一時の過ちありし幾多の國民を監獄に繫ぎ、却て永久に墮落の底に蹴落し、自からは忠君愛國の美名をかざして政權の爭奪に浮身を窶し、國家の名によりて私腹を肥やすも尙法律違反でない以上は何等良心の咎めを受けないと云ふ律法主義の世は、誠にイエスの時代と同じく、決然其桎梏を脱して靈の自由に嘯くべく、イエスの福音を要求してゐるのである。彼の福音はげに現代の病患を癒やす唯一の妙藥である、唯一の救ひである。處で私は次に福音の梗概を略述せねばならぬ。

四　福音の要諦

既に述べたる如く、人と人との關係を外的に、律法的に見たイエスの時代に於けるユデヤ人は、神と人との關係も同樣に外的、律法的に見てゐた。モオゼの戒律や預言

者の敎訓は即ち神の律である。神と人との關係は君臣の夫れの如く、或は主人と奴隷の夫れの如く、神は只既に表示せる意志に從つて一歩も假借することなきタスクマスタアである、親方である。吾等は外的の律法（固定した道德律）に維れ命維れ從うて其一點一畫をも違へざらんことを期し、日夜戰々兢々として神罰をのみ恐る。これ神は傲然暴君の如く、深く九重の雲井に隱れて、只其律法の采配で人類を頤使し給ふとのみ考てゐたからである。

十八世紀に於ける社會上の專制主義は同時に宗敎上の專制主義であつた。同世紀にルソォ等が民約說を以て專制君主、殊にルイ十四世の如く『朕は即ち國家なり』と暴言せる者を非難せしと同時に、デイズムと稱して宇宙を神の造り給ひし一個の機械と見、神は超然暴君の如く其意の儘に人間なる傀儡を操り給ふと視し神觀も衰へた。神と人間との關係は諸國に起りし立憲政體と同樣、敎派の憲章なる敎理敎條に囚はれた律法主義に傾いた。神は即ち宇宙なる立憲政府の君主と仰がれたのである。十九世紀の民

本主義が『自由』『平等』の旗を上げた新らしい社會の經驗も、いつしか秩序整然たる律法主義に縛り上げられて『友愛』が實現し得なかつた如く、個性の權威と良心の自由を高調して舊敎より分離せる新敎徒は三百幾種の敎派に分れて、各絶對の眞理と見し敎理敎條に立て籠り、外律主義の宗敎に辛うじて信徒の倚心を繫いでゐた。十九世紀は社會上にも宗敎上にも一面に於ては自由民權に內的生活の充實を主張し、他面に於ては著しく外的に權利義務の爭奪と、生存競爭の個我主義に、いたましくも却て帝國主義、律法主義の氣運を高めたのである。斯る時代に於てこそ我等は二千年前のユデヤに於けると同じく、凡べての外律主義、即ち社會上に於ては帝王神權主義、國家至上主義、民族主義の非を鳴らし、宗敎上に於ては神靈王權主義、敎理敎條主義、敎派主義を斥けて、單純なるイエスの福音に歸れと絶叫し、社會上にも宗敎上にも民本的な世界同胞主義、人道的博愛主義の實行を叫ぶのである。

世界同胞主義(Universal Brotherhood)然り、福音の要諦は茲にある。そは從來神と人

との關係を律法的に見て、遠く疎く且つ冷酷に、何もかも權利義務的に律し去らんとせし傾向に逆つて、イエスの主張せし天父說に我等が總ての社會關係の根據を置かうとするのである。即ち神は王者なりと思ひて、吾等は遙か末座に摺伏し、其鼻息を伺うて恐れ入らんより、寧ろ吾等の家庭に於ける慈父の如く相親み相近づけと云ふのである。神が最も直接に吾等自身に近爾し給ふこと(Infinite nearness of God)是れ福音の一大特徵である。神は父の如く我等に近い、然り、宇宙の大靈は雲の彼方でなく、吾等の心靈中に內住し給ふ。我等は寸時も怠らず、神の直接の啓示に心眼を披き心耳を傾けて、日々の生活を營むべきである。神が肩先から吾等の言行を一々窺き見給ふと感じ得ない人が、何んで强い道義心を保つことが出來よう。

されば福音の訓ふる處は行爲の細則ではない。『克く忠に克く孝に』など行爲の細則を規定する律法主義ではない。そは概括的に愛の心を以て萬事に接せよと云ふだけである。そは外律的でなく、內律的に、否な寧ろ任意的に心の態度を正しくすることで

ある。そは孔子の教の如く仁義禮智などの綱目や組織に渉つてはゐない。ポオロの如く忍耐とか練達とかやたらに論理を追うて人を訓ふる道學的の口吻では決してない。イエスの福音は新らしき道德律を世に宣布したものでは勿論ない。イエスは從來神の言と信ぜられしモオゼの律法の外的なるを批判して曰く『殺す勿れ、姦淫する勿れ、詐りの誓を立つる勿れと言へる事あるは汝等の知る處なり。されど我れ汝に告げん、人を憎む勿れ、婦人を見て欲情を起す者は心既に姦淫したるなり。絶えて何事にも宣誓する勿れ（誓は內的に神の指導を斥け、外的に過去を以て己を律せんとする愚行なればなり）』と。是れ決して新しき道德律の建設ではない。そは外律的な勿れ主義の道德を排し、人を憎むは愛の反對、劣情を以て婦人に對するは愛の反對、誓を立つるは內的生活の自由を束縛する愛の反對なるを示し、內律的に任意的に愛の心を以て全身全靈を充たし、人に對し世に處せよと云つたものに外ならぬ。

主の禱と稱せらるゝイエスの祈禱に曰く『天に在す吾等の父よ（宇宙の大靈は王に

あらず父なり）、願くは御名を崇めさせ給へ（神は靈的實在として崇めしめよ）。御國を來らせ給へ（理想的社會の建設）。御意の天に成る如く地にも成らせ給へ（神の理想を日常生活に實現）。我等に日用の糧（靈的の食餌）を今日も與へ給へ。吾等に負債ある者を我等が免す如く我等の負債をも免し給へ（吾等の罪を恕し給へ、吾等も亦他の罪を恕さん）。吾等を誘惑に導かず惡より救出し給へ（誘惑に打勝たしめよ）。國と力と榮とは永へに爾のものなればなり（吾等が理想と實現及び其榮光は絶間なき神靈の加護による）』と。是れ福音の要諦を盡せるものである。（括弧中の文字は著者の註解）

福音の要旨はイエスの言の如く、神は父なるが故に愛の心を以て神に接し、人は凡て神の子なる故に吾等の兄弟として、兄弟の如く相親み相愛せよと云ふに外ならぬ。即ち全情全靈全心を盡して父なる神を愛し、兄弟なる全人類を愛せよ、惡に敵する勿れ、汝の敵をも愛せよと云ふのである。されば福音の本領はポオロの云へるが如く十字架の贖罪にあらず、クリストの復活にあらず、來世の應報にあらず。そは宇宙の大

靈と人格的に繋がれる全人類の兄弟主義である。借問す、そは餘りに單純ではない乎と。然り、餘りに單純なるが故に世界共通の眞理である。佛教も回々教も儒教も教育勅語も其根據は皆茲にあらねばならぬ。又此點に於てイエスの福音は世に有りとあらゆる道德、宗教の根本義を最も明白に最も大膽に宣言し、先づ吾等が靈的生命の源頭を清めんとするものである。されど其實行は甚だ困難である。困難なるが故に吾等は努力奮鬪するのである。努力奮鬪して而して萬一にてもイエスの福音を如實に罪の此身に體顯せんと祈求するのである。人生の意義之を措いて果して奈邊に求むることが出來よう。

五　イエスの福音と解放の宗教

イエス曰く『我に來れ、我が軛は輕ろし』と。是れ彼れの福音が吾等に心靈の解放と精神生活の自由を齎らすものたるを意味するものである。吾等は外的に煩瑣な社交

の儀禮や冠婚葬祭の固定した風習に囚はれ、精神なき道德の形式や、生命なき日常生活の因襲に拘束され、又は國法や宗門や其他あらゆる社會制度の桎梏に縛られて、己が自由意志の躍動を試むる能はず、其苦痛に堪へ難くなりては『我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ』と悲鳴を擧ぐるのである。又他面に於ては社會生活の衝突より起る雜多の問題に觸れて、自我の內的生活に空虛を生じ、僞善を以て之を掩ひ、自ら自身を欺いてゐる虛僞の生活に飽き果てゝは、心靈の解放を叫び精神の自由を呼ぶ。斯くて或は社會を咒ひ、或は自己を咀ひ、悶々の情やるかたなく、眞率の態度は却つて之に苦惱の度を加へ、何とかして此悲慘な境涯から解脫しようと願ふ。是れ自意識の念强く、良心の刺戟旺んなる者の等しく經驗する所である。

十九世紀の狂的天才ニイチエはクリスト教道德を奴隷の道德なりと嘲り、有りとあらゆる社會の舊慣因襲に逆つて善惡の彼岸に超然たれと絕叫した。彼も亦吾等と同じく社會の虛飾と形式と儀禮と僞善に慊らず、心靈の自由を求めて天地に慟哭せる人道

の勇士なりしには相違なきも、クリスト教道德を以て奴隷の夫れと視しは、誠にイエスの福音が『眞理は汝を自由にす』てふ解放の宗教なりしを知らなかつたからである。

ユデヤの昔、安息日（日曜）には必ず國民一般に休業するを神の律として遵奉してゐた。されば安息日に勞働するは例ひ善行のためなりとも違法背神の行爲として社會の制裁を受けたのである。イエスは斯る嚴格な社會制度の裡に育つて彼は必ずしも舊慣に拘泥する人ではなかつた。或る時彼は弟子等と共に餓えて日曜日に穗を摘み、或は靈的にも肉的にも病を癒す業を敢てして憚らなかつた。果せる哉、社會の權威は直ちに彼に壓迫を加へ、彼が破戒の行爲を詰責した。然るに彼は曰く『人は安息日の爲め生れたるに非ず、安息日は人の爲めに作られたるなり』と。

是れ凡ての社會制度は、國家も法律も道德律も慣習も、皆夫れ人間生活の保護、發展、人道の進步向上のために存在するものであつて、若し一の社會制度が其發生當時の目的を達して、今や一層高き人道の發展に害を及ぼすに至りしとせば、どし〳〵之

を破壞し去らねばならぬと云ふ意であつて、社會制度は國家でも國法でも皆夫れ人間共同生活の手段であつて目的ではないと云ふことを意味するのである。"The end of man is man" 人生の目的は人間自身なりと。心靈の自由發展を阻害する凡ての舊習は當然打破すべきもので、之に拘泥するは自ら自分の自由を棄却するものである。されば吾等は人權の平等を叫び自由を稱へ、男女老若貴賤貧富の分ちなく人は皆同等の價値を有す、國王も百姓も人間としての價値は同一であると云ふ。久しく家庭に繫がれし婦人、工場の機械を眞似る職工、皆夫れ自由の空氣に解放して、各自獨特の人格を修養し、人生の眞價を發揮せしめなくてはならぬ。されば我等は先づ自由を呼び平等を叫ぶも、若し夫れ此自由平等を律法的に强行し、制度的にのみ保障せんとするが如きは、イエスの福音に協へる眞の自由平等の叫びではなく、且つ到底實現し難き僞りの自由平等に外ならぬのである。

眞の自由平等は機會均等の夫れである。而してイエスの福音は靈の自由の前件とし

て先づ兄弟的愛の宗教を稱ふ。愛はそれ萬物を融和し平等にする人生の根本原理なるが故である。人は必ずしも學者たる能はず、智者たる能はず、富者たる能はず、權者たる能はず、才人たる能はず、事業家たる能はず。されど何人と雖も愛者たり又愛人たり得るに平等の機會を持たないものはない。人は愛者として初めて僞りなき自由意志の生活を營むことが出來る。世に愛なき自由平等の主張ほど危險なものは他にないのである。

人若し自己の道德的行爲を人生の義務（本務）と感じなば、其處に多少の苦痛なき譯には行かぬ。而して彼れの行爲は聊か不任意的に且つ不自然ならざるを得ないであらう。然るに心に愛を感じて之を行爲に現はす時、吾等はそが如何に屈辱的奴隷的行爲と見えるものであつても、喜んで之をなし、愛の奉仕と其悅びは吾等が靈に無限の自由を感せしむるものである。吾等は單に自由平等を主張して他と爭ひ他と相鬩ぐ、歐洲の大戰爭は其一例である。然るに吾等先づイエスの福音に從ひ、宇宙の大靈に對し

て慈父に對するが如き愛を捧げ、全人類に對して只兄弟的友愛の眞を致さば、吾等が道義的行爲は凡てこれ任意的自發的愛の衝動となり、歡喜と悅樂に充たされて何等靈の拘束を感じないのである。誰れか兄弟を愛するに律法的義務を感ずるものありや。彼は只愛す、故に彼は兄弟のために善を盡し美を濟す。イエス曰く、汝等世界同胞（隣人）に對して此くの如くせよと。愛はそれ吾等に靈の解放、精神の自由を與ふるに至上の權威なるが故である。噫狂死せるニイチエ、彼は此愛の福音を會得せず、體讀し得ずして自殺したのである。憐むべき哉。

要するに、父なる神は外的に律法的服從を吾等に要求し給はない。彼は內的に兄弟的友愛の信を求め給ふ。是れ福音が束縛より任意に、律法より自由に、義務より愛に導く解放の宗教たる所以である。

六　神人合一と自我の充實

ルウタアの所謂信仰の特質は Communion with God 即ち神人の靈交又は合一である。神と人との社會的關係、即ち人格的靈交は實に宗教の根本的要素であつて、そが道德と異る所以も茲にあり、又哲學的冥想と異る點も此處にあるのである。

然らば神人の靈交或は合一とは何事を意味するのであるか。昔し人間の靈魂（死體より逃れ去るてふ人魂の說を參照）を物質的の實體と思ひし頃は、神の靈を以て同樣に或種の實體を具へたる聖靈（ホオリイスピリツト）となし、人間が靈的に救はれし時、聖靈鳩の如く下り來りて個々の體內に入ると思うてゐた。原始時代のクリスト敎徒の經驗せし聖靈の降下は、今日尙ほ日本の片田舍に殘存する野狐憑が其肉體の或部分に俄然勃起したる腫物を示して、是れ狐の靈の住居なりと指摘し得るが如きと同樣の現象であつた。されど今日尙ほ此種の聖靈の降下を信ずる者は恐らく野狐憑を信ずると一般、迷信家の外無

之きことと思ふ。

又ポオロなどの所謂、吾等クリスチャンは肉に死して靈に生き、我れなる有限の存在は日に〳〵消滅して、クリスト我れに代りて我が內に生き、我は日に增し永久不滅の存在なるクリストとなりつゝあるを喜ぶと言へるも、今日に於ては一の形容語であつて、其詩的表樣の美はしきは之を讃すべきも、嚴格な意味に於て、否な吾等の日用語に於ては之を文字通りに解釋することは出來ぬ。然らば神人合一の經驗は最早信ずべからざる過去の妄想なるか。曰く然らず、今少しく之を述べよう。

神人合一の狀相を今日の普通語で解釋すれば、そは人と神と感情を同うし、目的を同うし、俱に相携へて宇宙の進化向上の爲に働くと云ふ義に外ならぬ。吾今愛人を有つてゐると假定せよ。共に胸襟を披いて相語り、同じ樣な趣味を有ち、同じ樣な感情を有ち、互に相愛して生活の目的を同うし、共に相提携して共通の理想を趨ひ求むる。是れ吾等二人の靈か融合一致せるものなるが故ではない乎。神人の合一も斯る社會的

人格的のものであつて、神の人に對する、又人の神に對する愛の力による靈的の融合である、一致である。

人と人との間に於ける愛の一致結合は言語の媒介によりて容易なるべきも、神と人との場合は以心傳心の神秘的靈感であるから、唯感情を同うし目的を同うすと云ふも、其内容に至りては各自の靈的經驗によるの外なく、宗教の神秘的な要素は實に玆にあるので、之を一般的に客觀的に說明するは勿論不可能である。併しそは古人の所謂見神の實驗とか、光耀に漂うて無何有の鄉に逍遙したとか云ふやうな一時的發作的のものではない。常住不斷、吾等が日々の生活に於て、吾等の思想言語動作を小なる自我の立場からせず、宇宙の大靈なる神の目から見たらどうであらうかと思ひ、神の立場から如何に考へ、如何に感じ、如何に行爲すべきやを思うて自己の生活を營む、之れ今日の平凡な言葉を以てする神人の合一である。之をなすにはイエスの常になせしが如く、無形式無言の祈禱が必要である。

神人合一、然りそは誰にでも出來る、輙いことである。而も實際に於て吾等之れを爲さゞるは何が故ぞ。そは吾等の肉に繫がれる自我心が餘りに强いからである。吾等は自己の狹い小さい個體と其六七十年の生涯に立籠りて、之を唯一の我物と思ひ、之を愛撫し之を扶養することのみを考へて、宇宙全體、人間全體の利害休戚や其盛衰榮枯の運命に就ては我れ關せず焉と對岸の火災視してゐるが常である。人は自我の内に蟄居して恰も蛤の如く、是れで安全だと貝蓋を閉ぢて自我の充實を誇つてゐる間に、何時か魚屋の店頭に持來されて、眼を開いて見れば『一山百文』の正札附、何と情ない話ではない乎。

『自我充實、自我實現を欲する者は先づ自我心を棄てねばならぬ。禪宗の歌に『切り結ぶ刃の下は地獄なれ、身を捨てこそ浮ぶ瀨もあれ』と。聖書に曰く、得んとする者は失ひ、棄てんとするものは却て之を得と。又曰く『汝自身を棄て十字架（死の苦）を擔ふて我に從へ』と。是れ自己犧牲の精神を語るものである。然し、自己犧牲とは必

ずしも身を殺すことではない、欲念を絶つことではない。自己の生涯を神の尊さ事業の爲めに奉獻することである。戰爭に往つて短時間の剛勇に一身を擲つて功名を遂ぐるのではなく、六七十年の長い生活を神の清き事業、而も餘り世間の耳目を惹かぬ地味な事業に傾倒し、一意專心の誠を捧げて奉仕することである。

永久朽ちざる事業のため國家永久進化して止まざる宇宙全體のために生くる人は、其人の趣味も抱負も希望も理想も常に茲あるのであつて、彼は宇宙と共に生き、神と共に働く人である。そは誠に自然人なる自我を靈的に押擴げて、萬有一切を攝取し、自然と人類の凡てを愛の內に抱擁して之を自我となし、神と融合一致の生活を營む人であつて、是より大なる自我の充實はなく、是より明かな自己の實現はないのである。神人合一は即ち自我充實の極致であつて、クリスト敎の本領も亦茲に存するのである。

七　家庭的愛の宗敎

イエスの福音は社會の家族化を敎ふるものである。即ち神を家長とする全人類の世界一家主義が福音の眞髓である。古來世界を一國とせんとする計畫は屢行はれて、アレキサンダアの東征やロオマ帝國の勃興やシヤロメンやナポレオンの事業も或る意味に於て世界的國家の建設であつた。されど國を興さんとする者は常に權勢に據り武力に訴へ、法政の施設を重視するも、世界を一家族たらしめんとするイエスの訓へは凡ての律法と武力と權威とを擲つて、唯だ親的兄弟的の愛を以て之を成就せんとするのである。

吾等人間社會に產れし者は家庭が愛を根據として成立つて居る事を誠によく合點してゐる。クリスト敎の眞義は他にあらず、唯た此家庭的の愛を人類一般、宇宙全班に押擴げようといふのである。又同時に此家庭の愛に宇宙的意義を見出して之を一層靈化しよう、聖化しようと云ふに外ならぬ。

ルカ傳十五章に放蕩息子の比喩がある。彼が悔改めて父の家に歸りし時、父は盛ん

に饗宴を張りて彼を歡迎したといふことである。人間の罪に對する悔改めと神の宥恕に關する說話として是以上の比喩は蓋し何處にもあり得ないであらう。吾等は何人も神の聖き御前に引き出されて、何等か罪の苦痛を感じない者が何處にあらう。然り、彼の放蕩息子が『罪に汚がれた自分は最早父の子と呼ばるべき資格はないから、只奴僕としてなりとも父の家に歸りたい』と思うたやうに、赤裸々の自分をさらけ出して吾等が神の御前に立つ時『私はあなたと靈的に父子の關係にある者であります』と臆面もなく云ひ得る者が果して幾人あらう。仔細に點檢せよ、吾等は皆父なる神の御前に一個の放蕩息子である。

吾等若し彼の放蕩息子が父の家に歸へりしき如き態度を以て、己が心を謙虛にし、淸淨にし、愛と同情の精神を以て世の人々に接したならば、人間の生活は如何に聖化さるゝであらう乎。吾等、年長者に接せば皆夫れ父母の如く尊敬し、同年輩の人には皆兄弟の如く相親み、年少の輩は全べて是れ己が子の如く慈しみいたはり往くことが

出來たならば、人類の生活は如何に美化されるであらう乎。知識何者ぞ、文明何者ぞ、人生の進步向上は只淸き愛の發展あるのみである。

トルストイ曰く、世のあらゆる罪惡や、悲劇の裏面には必ず兩性の問題が蟠つてゐると。吾等若し凡ての異性に對して兄弟姉妹的の愛を以て交際せば、兩性の關係が如何に神聖となるであらう乎。自分の姉妹が醜業に從事するなど夢みてさへ身震ひする人々が、往々他人の姉妹の斯る憐れな狀態にある者を獸類の如く取扱うて恥ぢない者があるではない乎。吾等若し眞に己が姉妹や母の人格を敬愛する心を以て婦人に接せば、吉原や祇園は立處に黑土原となるべきである。其他一般に兩性關係の紊亂は由來愛に基くもの多かるべきも、そは聖化されざる愛、即ち兄弟的ならざる愛の致す處である。

歐洲の戰亂は過去五年の長日月に亙りて漸く其矛を收めた。財を亡すこと幾千億圓、人を殺傷するもの幾百萬人。彼等若し他國人も自國人と同樣、同じ宇宙の大靈を家長

と仰ぐ一家族の兄弟だと思つてゐたならば、どうして鐵砲の引金が引けたであらう、どうして銃鎗の切先が鈍らなかつたであらう。彼等は皆自我の愛、君國の愛、野心の愛に囚はれて、全人類同胞的の清愛に啓發されてゐなかつたから戰爭に往くことが出來たのである。

一部少數の人士は金殿玉樓に山海の珍味を飽食して、大多數の貧民は食に窮し職を求めて路頭に迷うてゐる。經濟組織の缺陷は幾世紀の時代の錆に腐れ付いて、貧富の懸隔は早や世道の常であるかの如く思はしめてゐるが、吾等若し私に念ひを宇宙の太極に馳せて人類の歸趣を想像し、財產は唯生活の手段であつて目的ではない、我等此世に生れ來ては各自獨特の人格を發展せしむると云ふ高尙な目的を持つてゐることを知つたならば、此目的に向つて進む機會を均等ならしむる爲めに、輿衆を機械の如く牛馬の如く使役し、而も相當の糧と人間的取扱を與へないやうな殘酷なことは出來ない筈である。然り、我等に兄弟的の愛があつたならば、彼等をして平等に生產の分配に與らしめ、彼等が品性を發輝して、各神の如き完き人格に進み往く進路を妨げないであらう。又勳位や地位の異りを以て、或は王侯や官職の權威に依つて、他の人格に敬意を拂はず、之を己が野心の道具に供するやうなことは決して出來ない筈である。

おゝ神よ、願くば吾等をして家庭的の愛を以て萬人に接し、萬事を取扱はしめよ。然らば貧民問題も、勞働問題も、婦人問題も、平和問題も、然り、凡ての社會問題は立處に解決するであらう。親の眼には迂愚の子程却て可愛しと。又兄弟は知識の故に、財產の故に、地位の故に、親疏あり階段ある筈がない。人の人として敬愛さるゝ所家庭の如きものはない。家庭の空氣は愛を以て滿たされてゐる。吾等は何故に此種の愛、即ち家庭的の清愛を社會一般に擴充し得ないのであらう乎。否な、何故に之を凡ての社會關係に應用しようと努力しないのであらう乎。神よ願くば御力を授け給へ。

八　イエスの人格

過去二千年間所謂正統派と稱する異端者はボオロの迷信に驅られて、吾等の崇拜するイエスをクリストと稱し來つた。クリストとは王者の義で、露帝をザアと呼び、獨帝をカイザアと云つたのと同じである。されどイエスは王者（クリスト）ではなかつた。王侯貴族は世俗的にも靈的にも彼れの最も嫌ふ處であつた。吾等も彼れの精神茲にあるを知らば、彼をクリストと稱して彼れの人格を傷けてはならぬ。然り、彼は一個の平民であつた、大工の子であつた。彼れの常職も多分大工であつただらう。彼れは世の所謂智者學者ではなかつた。されど彼れは敬虔なる信仰の人であつた。彼れが敬虔なりし態度は聖書の至る處に記されたる彼れの祈禱を以て知ることが出來る。彼れは誠に祈禱の人であつた。

彼れは如何なる徑路を通つて成長した人であつたか聖書の貧少な記事では分らぬ。

十二歳の時エルサレムの殿堂で學者達と問答せしと云ふ傳說と、靈肉共に健全に成長せりと云ふ記事の外何も殘つてはゐない。三十歳前後の時、イエスは時代の先覺ヨハネの弟子となり、彼れより洗禮を授かり、彼れの口吻を學びて傳道に從事せしことあるは多分事實であらう。されど彼れが獨特の使命を感じて、ヨハネの唱へし最後の審判即ち正義の福音に對して、家庭的愛の福音を唱道するに至りし迄には、多くの修練と誘惑と奮鬪があつた事と思はれる。而して其形跡は明かに『荒野の誘惑』に殘つて居る。

彼が傳道の期間は僅か一年半位であつた。彼は先づ故鄕なる山水明媚のガラリヤ湖邊より立つた。彼が常に道を說きし人々は湖邊の漁夫や百姓達であつた。是等の人々の間に熱心な信者を得ること少くはなかつたが、民衆の大部分は盲目で、彼れの家柄によりて彼を評價し、彼れ又一個の常人に過ぎずと蔑むで、彼に傾聽しなかつた。彼は『豫言者の故鄕に尊ばれざる』を知り、多く遠征を試みて他鄕に多くの信者を得た。

一たび活眼を開いて彼れの温容に觸れた人には彼は神の如く神々しき人格として、諸々の病より癒されし人あるは事實に相違ない。醫藥を用ひず、催眠術を施さず、又何等の技術を使はざるも、只天眞流露たる彼れが美はしき人格に觸れて、肉體の病立處に癒しことあるべきは、今日も尙吾等が敬慕する人格の現前にて心躍り氣はげみて諸般の苦惱より免るゝことあるが如く、親しく吾等の經驗する處である。殊に靈的の病患を去りて新しき信仰の生涯に入りし者多かりしは尙更疑ひなき處である。而して是れ皆彼れの敎へが高尙なりし故のみでなく、又彼れの人生觀が深遠なりし故でもなく、只彼れの人格の偉大なりしが故である。靈は靈的に靈に傳はる。人格を啓發するは夫れ人格其者の力である。

彼は權威を以て人を訓へたりと。彼れの言葉に權威ありしは、彼が日夜寢食を忘れ、世のあらゆる歡樂を擲つて、只管彼が理想の實現實行に忠實なりしが爲である。『誰をか母といひ兄弟と云ふや、神を信じ、神の御意を爲す者は即ち吾が母なり吾が兄弟なり』と叫び、血族や國家や民族の上に超然として、神に就ける新らしき靈的家族の資格を高調し（山上の垂訓）、又『我が敎の爲に親は子に背き子は親に背き、妻は夫に背き夫は妻に背くことあるべし』と云ひて、己が生命の理想とする所、神の正義と天國（理想的社會）の建設の爲には、肉に繫がる恩愛の絆をも切斷するの覺悟あるべきを示し、『汝自らを棄て、十字架を擔うて我に從へ』と云ひて、男子苟も事を爲す、宜しく死を決して正義に殉し、神の御意を成すの覺悟なかるべからずと訓へ、彼自身も亦此覺悟を以て其敵敵の本據なるエルサレムを衝き、誤解と誹毀と叛逆の渦中に自らを投じて、遂に十字架上の露と消え失せた。彼は誠に奮鬪の勇士であつた、活動の人であつた。後世彼れの肖像を描く者、常に彼が眼光の烱々たる奮鬪的勇姿を彷彿たらしむるものあるは、かの佛像の結跏趺座して冥目參禪の姿勢なると比較して、何等好個の對照であらう。

されど彼は他面に於て温情掬すべき涙の人であつた。彼がラザロの姉達マアサやマ

リヤに對する友情や、サマリヤの井の端に跼して娼婦を訓えし柔しの心や、無學無能の弟子達に對する愛情の濃かなりし事や、到る處子供等が彼れの手に縋り頸に捲き付いたと云ふ、斯くも婦女子の愛慕を受けし實蹟は、彼が如何に優美温情の人なりしかを察するに餘りあるべしと思ふ。彼は又現代の説教者の如く金時計を閃めかして、一等切符で旅行する樣な人ではなく、さりとて彼は釋迦の如く托鉢僧でもなかつたが、身常に布衣を纒うて、世の棄民や貧民と寢食を共にし、彼等の内部生活に觸れて、肉的にも靈的にも彼等の慰藉となり奬勵となり、益友となり鼓吹者となりて、彼等を啓發し誘掖し、彼等を新生涯に導ひた。

實に彼は勇敢に剛毅に優美に謙遜に平和に卒直に、彼が唱へし無抗抵主義的愛の福音の最も熱心なる實行者であつた。否な彼が一個の平民として萬衆に平等の清き愛を捧げ、彼等の生活の改造に務めし事、夫れ自身即ち彼れの福音の眞髓として、永久朽ちざる靈的生命として、活きた教訓として、永へに人類を教へ、人生の理想を指導す

るであらう。されば彼れの教を知らんとする者は、先づ彼れの人格に參せねばならぬ。が、私の禿筆で以て茲に其萬一だも彷彿たらしむる事は出來ないから、讀者は自身共觀福音書に就て、直接彼れの靈的生命に觸れねばならぬ。然り、イエスの福音は彼れ自身の生涯であつて。イエスの生涯は即ちクリスト教の眞髓である。

九　十字架の意義

歴史は生きてゐる。「過去」は死物ではない。そは進み行く時代精神に絶えずレインタアプレット即ち改譯せられて常に新らしき意義を生み出し、限りなく人類の精神生活に貢献し往くものである。されば二千年前ボオロの見し十字架と今日吾等の知る十字架とは到底同意義のものではない。頽廢困憊の世、人間の靈力が極端に低下して萬事悲哀倦怠の色に包まれし時代は、何か急激なる超人的外來の力によりて、此苦難、平凡、厭惡の内より免がれ去らんとして、茲に神秘宗教(ミステリイ レリヂヨン)は起つた。秋枯れて春復活する

新緑の神なるグリシヤのバアセフォネや、小アジアのアチスや、シリアのアドニスやバビロニヤのタンムズや、國王にして死後復活昇天神化せりと傳へられしエヂプトのオシリスや、何れも不死の力を信徒に授くる復活の神として、又拜火敎のミスラは神と人との仲保者として、等しく各民族の信仰の中心となつてゐた。復活の神アチス崇拜の盛んなりし小亞細亞で、而かもミスラ敎の一中心地であつたタアサスのポオロに、十字架のイエスを復活の神と見、神と人との仲保者なりと解するは、當時の時代思潮に基くものであつて、現代人が萬事を進化論的に解釋するのと一般、何の不思議もない凡庸のことであつた。只そはミスラに代ふるにクリストを以てしただけである。

ユデヤの神話にあるアダムの失樂園を史的事實として信ぜしポオロは斯く云うた、アダムの原罪により人類は凡て滅びに往くべきである。されど神は吾等を憐み給うて其獨子を此世に送り、罪なき彼をして人類の罪を擔ひ、代罰を受けて十字架上に死し(新緑の神アチスの如く)、三日目に蘇生せしめ給へり。此宇宙的な芝居 (Cosmic Dra-

ma of Redemption と中世紀人は崇めたり)によりて人類は其罪より救はれたのだ、一人の罪により滅ぶべかりし全人類は一人の義によりて救はれたりと。ポオロの論理は至つて明晰である。其頃印度の佛敎にも所謂彌陀の四十八願を以て人類の贖罪のために法藏菩薩が苦みを自ら嘗め給ひしてふ代罰主義の救濟がアスヴアゴシヤの敎典に說かれ、後世、日本佛敎(淨土、眞宗)の骨髓となつてゐる。

されど今日吾等の歷史眼を以て見れば、是れ一個の傳奇小說である、茶番狂言である。人類はアダムにより墮落し、クリストにより復活すべく神の救濟劇を此世に演ずる愧儡であつて、クリストは三日間死んだ振り(然り、神は不死なるが故に)をした神自身の變身(受肉)に外ならぬ。斯くの如き神秘敎のクリスト、然り、頽廢時代の所產なる『信仰上のクリスト』が吾等の崇拜する『史上のイエス』と是迄同一視されてゐたのは甚だ遺憾に堪へぬ次第である。

然らばイエスの十字架はポオロ的解釋を外にして何等の意義なきものなるか。そは

ボオロ主義を一笑に附し去る現代人の精神生活と所詮沒交渉のものであるか。否、却つて、若し十字架なかりせば、イエスの福音は空想家の空論に終り、彼が人格の光明を發輝するに由なかりしなるべしと吾等は信ずるのである。ナザレの僻村に生れし大工の子イエスは古今獨歩の宗教的大偉才であつて、彼は如何にして生くべきやと云ふ人生の最大問題に觸れ、人生最高の理想なる神の子の自覺によりて、直覺的に宇宙の大靈と人類との關係を明かにし、家庭的愛の福音を提げて靈界の革新に奮鬪した。『狐に巣あるも人の子は枕する所なし』と歎ぜしまで晝夜兼行の大活躍、或は鞭たれ或は唾せられ、憎まれ斥けられて尙厭はず、エルサレムの運命を思ひては『母鷄の雛を守るが如き』憂ひに沈み、弟子達の暗愚をはかなみ、且つ彼れは時代に先んぜし爲め、世に容れられぬ我事業の成敗を顧みてはゲッセマネの苦悶となつた。而もあらゆる苦難や迫害に遭遇して屈せず撓まず、一層の勇氣を鼓舞して彼は靈的の奮鬪を續けた。

彼は誠に人類の精神生活革新の事業を企て、人生の向上發展のためにする世界同胞

主義的博愛の大理想を樹立し、此事業の爲め主義の爲め、畢生を捧げて奮鬪し、遂に十字架の處刑を餘儀なくせられて、主義のため理想のため、義死者殉敎者となつたのである。彼が殉敎の死は誠に彼の福音に血判せるものである。彼が十字架の血は人類の向上の爲にする彼が熱愛の最も熱烈なる表顯である。『七度び生れて國賊を滅さん』と誓ひし楠公は日本の國家が存在する限り國民の熱血を湧かしめ、忠君愛國の勇士を奮起せしむるであらう。彼が湊川の戰死は失敗の死にあらずして、成功の榮冠であつた。彼が忠魂義膽は大和民族の骨髓に徹して永へに第二の正成を作るであらう。

フロレンス共和國の爲に烙刑に處せられしサヴォナロラや、フランスの危急に趨きて偉功を奏し、後日敵軍に捕はれて火刑を受け、其死灰はセイン河に撒散らされたと云ふジャンダアクの如き、楠公と同樣、國の爲に殉した所謂『護國の鬼』である。又信仰のために殉死せしジョン フスやクランマアや其他多くの殉敎者が、如何に吾等の靈性の發輝に貢献せることよ、靈性の威嚴を高調せることよ。されど吾等のイエスは

過去數千年の歴史に見る、あらゆる義死者、殉教者に優りて一層偉大なる義死者である。そは彼が一國の爲めでなく、一宗教の爲めでもなく、全人類久遠の靈的生命革新のために戰ひ、最も大なる理想のために斃れたからである。彼の死は誠に萬代不朽の世界的榮冠である。

吾等は彼れの十字架を思ふ毎に、如何に自分が犧牲の精神に缺けてゐるかと云ふ事を悲まずには居れない。嗚呼何と儚い自分なる哉。願はくば彼れの絶大なる精神力に鼓舞せられ啓發せられ、彼の如く献身的に專心一意、然り、『心を盡し情を盡し意を盡して』敬神愛人の福音を實行し、己が主義の爲め理想のためには、敢て水火も辭せず奮鬪し得ん事を。然りイエスは此意味に於て、過去二千年間續々起り來りし多くの殉教者、義死者、殊に献身的の事業家を鼓吹した。是等道に殉ぜし靈界の偉人が史上に赫々の光明を放てるのは、イエスの靈的生命が彼等の内に勇躍してゐるからである。

蠢爾として爲すなき懦夫をして起たしめ、善に臆病なる卑怯者をして人道の勇士たらしめ、罪にからまれて苦悶せる弱武者に發奮の情熱を注いで、九泉の下より九天の上に復活せしむる靈的感化の力は、イエスの十字架に於て其最も緊張した靈的自在を發輝してゐるではない乎。是れ十字架の意味義深き所以である。

十　罪の贖ひと靈的生命の更改

ジョナサン　エドワアドや　ビリイ　サンデイ式に、不滅の火に燃ゆる地獄の苦しみを想像して、此世の罪人に先の世の苛責を說き、人間の低級なる恐怖心に訴へて悔悟に導かうとする、其目的はよし善なりとするも、其手段の非議すべきものあるは勿論、其結果に於ても悔悟者自身の靈的生命に著るしい進歩を見ることは出來ないのである。何となれば彼等は罪の生涯夫自身の邪惡を認めて悔改したのではなく、先の世で受くる地獄の責罰から免れんとする功利的な恐怖が動機となつて罪を去らうとするのであるから、彼等の道義的生活が高尚であり得ないのは無理もない話である。

又所謂正統派のクリスチャンが吾等の犯した罪に對してクリストが代罰を受けられたからして、吾等は唯此事を信じ、其難有味を感ずることによりて救はるゝとなす他力信心も、今日の鋭敏な道義的憧憬を滿足せしむる事は出來ぬ。我等の良心は自身の犯した罪のために他の人に代罰を受けて貰つて滿足する程遲鈍ではあり得ない、殘忍ではあり得ない。吾等が罪を犯した時は相當の處罰を受くるこそ却て心地宜いもので、自身で罰を受けないことが寧ろ何時までも良心の苦悶を殘すのである。」

罪の苦みは罰の苦みではない。されば罰だけはよし他人が代償して呉れても、罪の苦みを消滅することは出來ない。此苦みは夫れ外的のものではなく、又慈悲深き神の下し給ふ處でもなく、吾等自身が內的に自身に與ふる苦みである、悲みである。されば此悲痛を免がれんとするに神の赦免を乞ふた處で、罪の事實を取り返すことは出來ぬ。慈愛の雨露を善人にも惡人にも等しく下し給ふ父なる神は或は罪を宥恕し給ふであらう。されど罪なる過去の事實は神でさへも取消し給ふことは出來ない。「されば佛

教の主張する如く、諦觀によりて救に至ることを得るであらうか。過去の罪業は致し方もない、只運命的に諦むるより外はないとて、消極的に心の平和を祈求することが出來るであらう乎。されど自身で犯しだ罪の恐ろしさを諦め去り得るやうな鈍い良心で以て、邪惡に打勝つて靈的生命の向上を圖ることがどうして出來よう。是亦覺束ない話である。

然らば如何にすべき。如何にして吾等は『救ひ』を得よう。如何にして罪の苦痛より免がれ去ることが出來よう。嗚呼吾等惱めるものなる哉。如何にして過去の汚れたる罪業を打滅すことが出來るか、甚だ惑はざるを得ない。「そは來世の問題ではない。現前刻下如何にして罪の苦痛を脫せんかと云ふ焦眉の活問題である。思ふに靈の救濟は只消極的滅罪に於て之を求むることは出來ぬ。代償も赦免も諦觀も罪の事實は事實として之を打消すことは出來ない。さはれ積極的に汚れたる罪の生涯を轉化して、淸き愛の生涯に入り、己れが靈的生命を改造することは出來る。そは一種の創造的行爲であ

つて、雨降つて地固まるの例へに洩れず、若し茲に一人の罪人ありて、嘗て罪を犯して悔改めしことなかりせば、彼は斯く迄徹底的に彼れの生涯を改革して高貴なる彼れの人格を磨き上ぐることは出來なんだであらうと思はるゝ迄、彼れの靈的生命が更改されたとしたならば、よし彼が過去に於ける罪の事實は抹殺されなくとも、全宇宙は此罪人の心的革命によりて其全組織に革命的大影響を來たし、一段の進化向上を遂ぐるの結果を齎らした筈である。況んや、尙進んで其人が過去の罪的事實を改造して社會の福祉に轉化することが出來たならば、彼は主觀的にも客觀的にも所謂救に預つた者、即ち一層高い靈的生活の發展を遂げたものと云はなければならぬ。

由來罪は愛の反對であつて、愛他の念なき利己心が即ち罪である。而して吾等が此本能的に持てゐる利己心を棄てゝ層一層犧牲的に獻身的に、人道の爲め宇宙の爲め神の爲めに奉仕する淸き愛の生涯は之を消極的贖罪によりて獲得することは出來ぬ。そは只絕間なく靈的生命の更改を願ふ衷心の叫びと、之に伴ふ努力奮鬪、又之に應ずる大

能の御力によりて之を實現することが出來るのである。吾等が自然的野獸的生涯より人間的社會的の生涯に入り、層一層人格の向上を來し、終に靈的神的生活に入るには他の偉大なる神的人格の感化が如何に化成の力を逞うすることよ。見よ我がイエスを、彼は有史以來最も偉大なる宗敎的人格の活力であつて、彼が人格的感化の及ぶ所、如何に汚れた、腐れた、曲つた、ひねくれた、希望なき、精氣なき罪人にも、之に新生命を鼓吹し、新活力を喚起して淸き美はしき愛の生涯に就かしめ、靈的生命の妙諦を味はしむ。此意味に於てイエスは吾等の救主と云ふことが出來る。此意味に於て吾等は彼の崇高なる人格を敬慕し崇拜するのである。

來れ世の惱める友よ。來れ世の疲れ切た人生の旅人よ。來りて吾等のイエスを瞻仰せよ。彼は十字架に釘付られし罪の贖主ではない。代罰の甘受者たる神の獨子では尙更あり得ない。されど彼は彼が献身的な淸き愛の生涯と、人道の爲め神の爲にする犧牲の死を以て、彼は永遠に我等の靈的生命を刺戟し、督勵し、慰藉し、啓發し、一層

意義深き、一層徹底した光明の世界に導く吾等の道友である、指導者である。來れ諸人、來りて彼が人格の活泉に生命の水を汲めよ！

國民道德と宗教

一　軍國主義の破滅と國民道德

過去四ヶ年以上、世界の最終の日が來たのじやないかと疑はれたほど戰亂の災禍は言語に絶し、軍國主義の弊害は遺憾なく暴露せられた。されど暴力は遂に正義に打勝つことは出來なかつた。ドイツの主義とせし Might is right（力は是れ權なり）は反對に Right is might（正義は即ち力なり）を證明する樣になつた。

戰爭の殘害は迚も計り知ることは出來ない。夫れが戰爭によりて贏ち得た如何なる利得よりも大なることは勿論であるが、此戰爭は損害のみではなかつた。戰爭中國際團結の力を强め、國家民族を超越して人道主義、世界主義の道德が高調され、小國家の存在に對して大國家の夫れと同樣の尊敬を拂ひ、民族の意志を尊重すると云ふ國際

間の民本主義が行はれ、又交戰國内に於ける民衆の力が一層強く廣く認められ、如何に軍國主義の國であつても戰爭は軍人や爲政者のみでは出來ない、國民の協力が第一であると云ふことが分つた。又軍需品の製造の爲め勞働者の地位は高められ、婦人の能力が認められると共に其政治上社會上の地位が高められたことも慥である。一言にして盡せば、世界の民本化、是れ即ち今度の戰爭が齎らした世界的貢献の主なるものである。

顧みて我が日本は今回の大戰爭によりて如何なる影響を受けたであらう。火事場泥棒的に十五億の正貨を殖やし、同時に成金熱の流行を盛ならしめた外、どれだけ日本人の内的生活に革命的の變化を惹き起したかは甚だ疑はしいことである。各所に催された提灯行列の戰勝祝は外的に聯合軍の勝利を祝する位で、内的に日本人が戰勝により得たる精神的發展の極めて貧弱なるを慨嘆するに過ぎなかつた。日本が是れまで主義として取り來りし所はドイツと同じく國家主義、軍國主義であつて、軍人や官僚を

重んずる貴族政治であつた。されば日英同盟の往きかゝり上、聯合軍に味方はしても、尙半信半疑の傍觀的態度を取つてゐた。自分がデモクラシイを喜ばないで、どうして積極的にデモクラシイの擁護發展の爲めに戰ふことが出來よう。日本としては誠に苦しい立場に立つてゐたのである。

乍併、日本が民本主義を喜ばず、堅く軍國主義を守つてゐた第一の理由は國家生活の必要條件として國民の共同一致、犧牲的奉仕を求むるには國家至上主義による忠君愛國を鼓吹するより外はないと思つたからである。明治大正の教育は此點に於て甚だ努むる處が多かつた。而して維新以來養成し來つた此軍國主義は日清、日露の兩戰を經て其効力が發揮せられ、忠君愛國は日本人の專賣特許であると思ふに至るまで自惚れてしまつた。然るにこの確信は此度の戰爭に依つて全く裏切られ、歐米人も愛國心に於て決して日本人に劣らぬ。否な、却て日本人以上であることが分つた。日本人は徵兵忌避を企てたり、脫稅を敢てしたりするが、吾等が個人主義だの拜金宗などと嘲

つてゐた米國人にして却て義勇奉公の精神を發揮し、單に軍人が喜んで難に赴く許りでなく、學生や大學教授や富豪や議員などが率先して義勇軍に投じ、而も他國の難に赴きて奮鬪した。自國直接の危急存亡に接してゐない米國人が、只人道の爲め、正義の爲め、他國民を暴虐の手より救ひ出さんが爲めに、擧國一致の誠を捧げて盡瘁した。如何に米國人を侮つてゐた日本人も此點に就いて、成る程と感じてゐない者は在るまい。茲に於てか近頃日本の識者間に國民道德を云々するものが多くなつたのも無理はない。言論界に於ても、如何にして犧牲の精神を鼓吹することが出來るかとか、如何にして民心の統一を計ることが出來るかなど云ふ問題が可なり眞劍に現はれ出て來た。是れ日本が是れまで國家至上主義や軍國主義を以て國家の泰平を謳歌せしことの誤りなることを知り初めた第一歩である。

二　國家主義的不一致と民本的共同

國家至上主義を教育的に强ひた日本國民の忠君愛國の氣風が疑はれ初め、常に個性の自主的發展を重ぜし米國民に却て擧國一致の奉公的犧牲心の發揮を見るは是れ何たる好個の對照（コンツラスト）であつて、如何によく國民生活のパラドックスを顯はしたものであらう。國民を軍隊化し、命令と服從との關係に立つ、スペンサアの所謂 Regimentation によつて養成された國民はドイツ民族の如く、初めにはよく其統一を現はし、萬軍恰も一人の手足の如く活動する。そは誠に物凄い程有力な一致團結の樣に見えたのであるが、段々年月を經るに從つて、內に社會的の不安が蔓り、外から窮迫せられたる前、內から瓦解した。是れに反して個人の自由を重んずる米國では參戰當時こそ色々な反對が起つて或は國家の分裂を見るに至りはせぬかと疑はるゝ程であつたが、段々時日を經るに從つて輿論は一定し、國家を擧げて、民本主義を旨とせる正義人道の爲めに戰う

てふ理想の下に集つて來た。其集つた民心は決して命令的或は外律的に強ひられて然るのではない。自發的に任意的に各自の理解によつて斯の如き共同一致を見るに至つたのである。徵兵などは勿論法律的に行はれたのであるが、食糧節減などは全く任意的に行はれた。此米國人の美德には、當時米國にありて之を目擊した私が殊に感歎した所である。食糧監督官は決して命令を發布しなかつた。只食糧節減の急務に接せる事を國民に訴へた。國民はフウヴァア氏の提案に贊同して、有志者は各戸を訪問し、家婦に節減法の實行に加盟するや否やを問うて歩いた。承諾した人は記名調印する者あり、或は左樣なことはしなくても節減を誓つた證據として、食糧節減加盟の標札を表口に下げてゐる處もあつた。而して其規約した無肉日だの無麥粉日などが蔭日向なく行はれてゐるには尙更敬服せざるを得なかつた。

日本では米價暴騰して、國民は生活難に追はれ、物價調節の急務に際會してゐながらも、日用主要物品の小賣値を法定するやうな事が國家至上主義、政府萬能主義なる

政府の手によつて行はれない。之れが行はれない許りでなく政府が外米を監理すると米商は內米を買占め賣惜みで却て國民を苦しめ、政府が內米を監理して收用米を賣出すと米商は之を買込んで正直な値段では賣らず、桝目や等級を誤魔化して國民を欺く、東京市の如きは公設市場を設立せんとしても、只少數の外今に其設立に往き惱んでゐる。そは商人が之を妨ぐる許りでなく一般市民が斯る公共的施設に冷淡なるが故である。單に市民が冷淡な許りでなく、國民が一般に不正直で、自分の眼前の利害のみに躊躇して公衆一般の利害に無關心であるからである。夫れは富豪にして廉賣の米を買つたり、廉賣券の買占めをやつて政府の慈善事業を裏切る樣な人物が少くなかつた事を以て見ても分る。是れに反して米國などでは日用主要物品の市價が公定されて、夫れが爲めに他所に經濟上の不調和など生ずることなく行はれ、又戰時稅として課せられた奢侈稅例へば靴一足十圓以上、服一着三十圓以上課稅するなど云ふことが正直に圓滑に行はるゝのは誠に不思議に思はるゝほどである。

三　自律的道德と民本政治及び教育

以上の如き對照の例を擧ぐれば限りない程であるが、要するに日本の國民道德は英米佛などの先進國に比して著しく低級である。日本人のみ忠君愛國で、孝養心に篤く、東洋の君子國として誇るべきだと幼少時から吾等が敎へられてゐたのは全く詐りである。成る程日本人は服從道德に優れてゐよう。彼等はよく上長者の命令を守る。僕婢はよく主人の命に從ふ。併し服從道德に育てられた國民は自主自發的な道德に缺けてゐる。彼等は退いて惡をなさないだけの道德心に强いかも知れぬが、進んで自發的に善行の勇士たることは出來ぬ。由來服從道德は封建時代の遺物である。個性の權威が認められず、社會は只群衆として動いてゐた時代には夫れでよかつたかも知れぬが、今日自由民權の稱へらる社會に於て服從道德は最早何の力ともならぬ。

私は日本の國民道德を外律的な服從道德より、內律的な自主道德たらしめ、外界の

權威を以て國民の協同一致を强ゆる代りに內界の權威によりて任意的に國民思想の統一を計る方法として、先づ國政を刷新して民本的にせなければならぬと思ふ。一般投票によつて男女對等に參政權を與へ、爲政者は內政にも外交にも秘密主義を棄て、眞に萬機公論に決するの主義を以て、何事も國民に相談せねばならぬ。從來の樣に官僚內閣が萬事を秘密に附し、サイ〳〵リヤに出兵しても何の爲めの出兵やら國民に能く了解せしめない樣では、どうして國民の協同一致を期待することが出來よう。萬衆の共同一致を求むるには彼等の興味を惹かねばならぬ。興味を惹起すには其事業を理解せしめねばならぬ。されば六千萬の人口を有する日本か僅々二百四十萬の人々に參政權、而もそは財產による參政權を認めた位で以て、どうして國民の國政に對する興味を起し、共同的率仕の精神に湧き立たしむることが出來よう。日本人は國政を少數の爲政者に任せて自分は政治に極めて冷淡である。だから彼等には自主自發的に國家に奉仕する自覺が出來得ない。米國の如き國家は國民自身の國家であつて、彼のリンコオン

が云つた通り『人民によりて組織され、人民によりて治められ、人民の爲めにする政治（"government of the people, by the people, for the people"）を根本義とせるが故に、國民は外界の權威によりて強制されることなく又強制することを好まず、自主自發的に共同生活の實を擧げて往くのである。私は日本の國體を改めて民主國とせよと云ふ者ではない。英國は立憲君主國にして、米國にも劣らぬ民本主義の國である。私は日本が英國の樣な民本主義の國となるには決して難事ではない、容易に實現し得べき事だと思ふ。只爲政者が言論の自由を認め、參政權を擴張し、人民に國政參與の道を徹底的に開いてやればよいのである。

次に考ふべき事は教育の革新である。從來取り來つた劃一主義、注入主義の教育は服從道德を強ゆる國家に最も都合のよい教育策であつた。何となれば國民の個性的發展を喜ばず皆一樣に或る種の典型に嵌つた人間を造り、彼等をして想像心なく獨創心なく、只外律的に傳來の舊慣を墨守せしめ、以て無爲の平和を求むるには、劃一主義

の教科書を使ひ、注入的に教師の與ふる處の知識のみを學生が受繼ぐことに定めて置くが最も安全の策であつたのである。斯くて明治の教育は或る程度まで成功したであらう。團栗の背競べで誰れも一樣な、只怡々として服從する國民を養成するに成功したであらう。併し夫れは日露戰爭の頃までゝあつて、戰後、個性を重んずるルシヤやフランスの大陸文學が盛んに輸入せられ、自由競爭を重んずる商本主義が國民生活に滲透するに至り、國民は外律的道德の淺薄なことを感じ初めた。而して個性の尊重すべきを主張し初めた。併し彼等の所謂個性は自我主義、利己主義の個性であつて、個性の尊嚴と共に個我の責任を自覺した人格的個性ではない、從つて成金主義の我利々々亡者には成り得ても、社會奉仕の精神に充された自主獨立の人格とは成り得ないのである。

されば從來の教育方針を革めて、自主自律的開發主義、人格主義の教育を施さねばならぬ。知識を得るにも自主的獨創主義を重んじなければ、其道義的實行に於ても自

律的人格主義なることは出來ない。學問の劃一主義注入主義が常に服從道德、奴隷道德と相提携して行はれて居た如く、自主自律的人格主義の道德は所詮獨創的開發主義の敎育によりてしか之を獲得することは出來ないのである。試みに米國の敎育を見よ下は小學より上は大學に至るまで皆夫れ開發主義の敎育である。生徒の個性を重んじて各自の天才を發揮せしめやうと努力してゐる。中學以上、學校は宛然復習の場所であつて、敎習の場所ではない。每日敎師が明日のレッスンとして課した處を敎科書に據り又圖書館に於ける自主的研究によつて研究し、之を明日敎室に入りて敎師の前で復習する。敎師は只其誤謬を正し、又は總括的な知識を與へて學生の研究を大體的に指導するに止まる。されば彼等は日々の課業を Lesson とは云はず Recitation 即ち復習だと呼んでゐる。學校は知識を與ふる所ではない。知識を得る能力を啓發する處である。知識よりも一層内的なる道德は尙更の事、外界の權威に據りて之を注入することは出來ぬ。内から自發的に道德が成長し來る樣誘導せねばならぬ。之れを成すには

我が國從來の劃一的注入主義を擲つて、獨創的開發主義の敎育を採用せねばならぬ。

四　國民道德の擴張（エキスパンション）と深化（インテンシフィケエション）

併し敎育は如何に開發的獨創的になつても、それを指導する精神が宗敎的でなければ、眞に自主獨立の人格を養成し、内律的道德の人を作る事は出來ぬ。宗敎は勿論道德ではない。乍併道義的でない宗敎は徒に神秘主義に馳せ、或は淫祠邪敎に墮し、又宗敎的ならざる道德は淺薄であつて狹く、强き實行の力なく意義なきものである。須く道德は宗敎に靈化されたものでなければならぬ。宗敎に靈化されなければ其宇宙的意義を贏ち得ることは出來ないのである。

日本人が何をするにも淺薄で、耐久的でなく、凡てが間に合せ的なるは其紙子燈籠によく現はれてゐる。足に穿つ下駄も靴の如き耐久性を持たず、家屋や殿堂を建つるにも一時的な木造草葺きで、莊嚴崇高な念を起さしむる樣な石造の大建築大伽藍は見

當らぬ、是れ日本人が深い宗教心を持たないからである。日本人は猛烈な深刻な氣性に缺けてゐる。日本の國民性は俳句的にあつさりした處にある。あつさりした處即ち其深刻性を缺いでゐる所以であつて、例へば今度の戰爭に於て米國人はドイツ人を憎むの餘り其言語までも憎んで、公立學校からドイツ語を驅逐した程敵愾心に於ても徹底的であつた。人を極端に憎み得る人は亦極端に人を愛し得る人で、憎むこと小なる日本人は愛することも小なるものである。愛憎の念の深刻でない國民は偉大な宗教的國民ではない。見よ其言語を憎むほどまでドイツを憎むこと甚大なる米國人は、單に食糧を節減し、全國禁酒を實行し、ヅボンの裾の折り返へしを禁じ、婦人のスカアトを狹くし短くしてまでも聯合國民に衣食の料を供給した許りでなく、今や敵國ドイツにまで食料を供給して、一視同仁、人道的貢獻の精神を發揮せんとしてゐる。斯樣に愛憎の念徹底的なる態度は迚も我が日本人の容易に眞似得る處ではあるまい。

要するに日本の國民道德は狹くて淺い。夫れは家庭道德及國家道德に蹋蹐して、個

人道德に深化し、社會道德に擴張してゐないからである。日本は古來忠孝道德を以て國民道德の基礎とし來つた。孝は即ち家族に對する道德であつて、忠は即ち國家に對する道德である。然るに今や家庭道德は個人道德に深化し、國家道德は社會道德に擴張されんことを要求してゐる。由來文明は二面の發達を遂げて來た。一は擴張（エキスパンション）であり、他は深化（インテンシフヒケエション）である。原始時代の人間生活には個人なく社會なく、只漠然とした群衆の生活があつた。夫れが自然と家族を爲し、會族に廣まり、會族は市や州となり、遂ひに國家を組織し、今や世界を打つて一團となす世界の共和國が出現せんとしてゐる。是れエキスパンション（擴張）の一面である。然るに之と同時に生活の深化は行はれ、人間の同情の範圍が家族より會族に、會族より州や國家に及び、而して遂に世界主義人道主義を稱ふるに從ひ、個性の意識が段々強まり、個々人格の自覺が深くなつた。是れインテンシフヒケエション（深化）の一面である。私は日本の國民道德も同樣世界文明の風潮に從ひ、家族道德、國家道德を超越して個人道德、社會

道德に發展しなければならぬ焦眉の急に接してゐると思ふ。

日本人は道義的に二重生活を送つてゐる者が甚だ多い。例へば商人が家人や友人には嘘を吐かぬが、客に對しては出鱈目の嘘を吐いて恬として恥づる所を知らぬ。是れは家族として或は友人としての道德は持つてゐても社會の人としての道德は持たぬからである。若し社會道德が彼にあれば、友人だから嘘を吐かぬ、他人だから嘘を吐いてもよいなど云ふ區別を作ることは出來ない筈である。又政治家や實業家などが公人として手腕を揮つてゐれば、彼等が私人として如何に下劣な生活をしてゐても、世間では餘り非難するものがない程公私の二重生活が一般に是認されてゐる。是れも同樣人間として個人人格としての道德が薄弱なるが故である。政治家であらうと實業家であらうと、同じ人間だと云ふ自覺の上に立つ個人は、先づ個人としての立派な人格でなければ公人としての資格は出來ない筈である。又國家主義に跼蹐した日本人は冲野氏の云へるが如く嘗て西洋の小說を讀んでもヂョオヂやメリイやコセットなど西洋の

名前では是れに同情して泣いて呉れない、又興味を感じて呉れなかつた程であるから、譯者は牽强附會、丈二郎だの、毬子だの、小雪だのと日本流の名前に變名したのである。甚しきに至つてはヘダカブラアが如何にも別嬪らしい江田蕪子（かまこ）となつて現はれてゐるほど滑稽な變名を冠せたものである。然るに今やノラやマグダ、カチユシャやジユリエットなど原名其儘を使用しても、西洋人の戀愛談が日本人の夫れと同樣な理解を得、同情の涙を絞り得る樣になつた。是れ文藝趣味の大なる進步と云はねばならぬ。是れと同樣に、世界的な同情と博愛の心が道德的にも發揮されなければならぬ。即ち國家道德を超越して世界的人道主義の道德とならなければならぬと私は思ふのである。

日本人は從來、日本人と外國人に對するに別々な道德の標準を以てしてゐる。日本人には賣れない樣な品物を粗製濫造して支那や朝鮮の市場を誤魔化したり、日本内地で生活の出來ないほど粗製濫造した劣等な移民を海外に送り出して至る處に排斥を受

け、商品に於ても人物に於ても粗製品と日本品とは同意語ならしめてゐる。今や戰禍治まりて世界は最早武力の世界ではない。是迄日本は軍事に於てこそ、而も夫れが東洋に於ける軍事に於てこそ、聊か頭を擡げて居つたけれども、今後は最早武力の競爭ではない。世界の共和國、或は國際聯盟が成立して軍備全廢が實行さるゝ曉には、日本は何を以て歐米諸國の間に伍して往くことが出來るか。今後の世界的競爭は即ち道德力の競爭である。道德力を經濟戰に傾倒して平和の戰爭に打勝つことである。然るに日本は從來の樣な偏狹な國民道德を以て、どうして世界の道義的競爭場裡に角逐することが出來よう。是れ私が國民道德を革新して個人道德、社會道德たらしめざるべからずと絶叫する所以の一つである。

五　個人道德と社會道德

從來、個人と社會との關係を論じて、個人と社會と相對立するものなるが如く考へ、

個人に忠ならんとせば社會成らず、社會の發展の爲めには個性を犧牲に供せなければならぬかの如く思ひしは誤りである。眞の個人主義は自我主義ではない、成金主義ではない。又眞の社會主義（ソサエティズム）は個性を沒却するのではなく、自覺した個々人格を以て組織された社會を意味するものである。されば個人道德の本領なる人格の完成は、社會道德の本旨なる愛の奉仕と只其見方を異にするだけで其內容は同一である。人間の個々人格は社會生活に於ける愛の奉仕によりてのみ向上發展するものなる故に、社會生活を措いて人間の個性に進步の道は得られないのである。又個々人格の向上を目的とせずして社會生活の發展は不可能なるが故に、社會存在の意義は之を個々人格の生存義に求めねばならぬ。此邊の消息は文明進化の過程に於て、人間の社會的同情心即ち社會心が家族より國家に、國家より全人類に發展し來ると同時に、個々人格の意識が强くなり、個性の意義及び價値が深長になつたことを見れば直ちに分る。

ゼエムスが社會我（ソオシヤルセルフ）なる言葉を使つて、個人の社會的自覺を云ひ表はしてゐるが、

之れ甚だ能き表現である。人には肉體的の自我と精神的の社會我がある。共に自分自身である。併し此社會我即ち精神我を家族全體に押し擴げて家族全體を我が愛の中に抱擁したる時、自分の人格は家族大となる。家族大となつた我れを國家全體に押擴け、國家の利害休戚を直ちに己が利害休戚として生活する人は彼れの人格を國家大ならしめてゐるのである。又之を世界全人類に押擴げて世界的の人格を築き、之を宇宙の總全に押擴げて宇宙的精神生活の人格を活現する。現代人の所謂宗教生活は斯の如き宇宙的博愛の生活であつて、之を措いて神的生活(ディヴァインライフ)を他に求むることは出來ないのである。米國の哲學者ロイスは人生の目的は宇宙的社會(ユニヴァサルコンミュニティ)に忠節なることであると云うた。彼れは宇宙的社會を神と同視してゐるのである。少くとも宇宙的社會の精神を神と見て、之に愛の誠を捧げて奉仕することが人生の目的だと云ふのである。私は大體に於て此說を尊敬するのであるが、今少し宗教的に而も現代的な見方によつて個人と社會の關係を明かにし、個人道德及び社會道德を今一層靈化精神化する必要ありと思ふ、

處で次に、私の所謂現代的宗教を略述せねばならぬ。

六　現代的宗教

昔の宗教は救ひの宗教であつた。罪に溺れて死せんとする難破船の船客なる人間が全智全能の神樣から救出されることであつた。乍併現代の宗教は救ひの宗教ではない。勿論罪に汚れた靈を改悔に導くと云ふ一面もあらうが、夫れは變則的例外であつて、原則として現代の宗教はサルヴェション(救濟)の宗教ではない Spiritual Progress (精神的進步)の宗教である。順當(ノオマル)な人間の精神生活を發展せしむることが現代的宗教の職分である。而して人間生活の限りなき向上發展の爲に吾等は最早全智全能の神を信じ得ない。若し神が全智であれば、宇宙には創造的の進化はあり得ない。凡て夫れ神の御意にあるものゝみが實現するので眞の進化ではなく、新しい創造ではないことゝなる。從つて全智の神の下には人間は一個の機械の如く神樣の計畫を實現するに

過ぎない。其處に人間の自由と自發的の活動は全くない事となる。又神が全能であれば此世に邪惡はあり得ない。あつても夫れは假現であつて眞の惡ではなくなる。併し此世の邪惡を假現だの幻覺(イルウジヨン)だのと云ふならば、正善も同樣に幻覺であらねばならぬ。之に反して若し正善の實在と共に、邪惡の存在を信ずべきならば、神は全能ではあり得ない。全能なれば邪惡は立ろに撲滅することが出來るからである。又吾等の信ずる神樣は全宇宙の創造主ではないであらう。神こそ却て全宇宙の創造物と云はなければならぬかも知れぬ。そは直接にも間接にもせよ、邪惡を創造した神は善の神たることは出來ぬからである。

かるが故に我等は全智全能の創造神を信ずる事は出來ぬ。吾等の神樣は全智全能ではないが、併し大智大能に相違ない。吾等の神樣は全宇宙の創造神ではないが、宇宙に於ける善なるものゝ創造主である。然り彼れは善の勇士である。惡に逆つて絕間なく戰ひ給ふ善のチヤムピオンである。神は全智ならざるが故に宇宙は新らしき善、新ら

しき正義、新らしき愛を創造して絕間なく進歩向上する。宇宙の運命は未知數である、無限大である。神は全能ならざるが故に人間は一個の靈的實在として、眞に神の事業に參加することが出來る。人間は一個の人格として神から助力を仰ぐことのみを以て滿足するものではない、受くることのみを以て滿足するは奴隷の事である。吾等は一個獨立の人格として自主自發的に神樣の此宇宙進化の事業に助力し得ることを喜ぶ。而して吾等の助力がなかつたならば宇宙の偉大なる創造的進化は不可能であるかも知れぬから、吾等が神より受くる助力が眞實適切なるものである如く、吾等が神樣に致す助力も眞實であらねばならぬ。是れ人生に意義あり價値ある所以である。

神は宇宙的英雄(コスミックヒイロオ)として宇宙の精神生活を指導し給ふものに相違ない。彼れは宇宙全體を我が同情の範圍に入れ、宇宙全體の生命を我が生命として生き給ふ一個のパアソナリチイ(人格)である。されば現代的宗教に於ける靈交即ちコンミユニオン、又は神人合一とは、古來神秘論者が信せし如く神と人と融け合つて一つの靈となることで

はない、人間の靈が神の靈に沒入することではない。夫れは寧ろ物質的の結合である。然るに吾等の神人合一は神と人との靈的融合である。宇宙全體を愛の內に抱擁して、宇宙的に無限大なる精神生活の創造的進化にいそしみ給ふ神と理想を同うし、目的を同うし、憧憬を同うし、趣味を同うし、同情同感、神と共に働き、神と俱に樂しむことが即ち吾等の神人合一であり、同時に神的生活の實現である。

斯樣な神的生活は決して空想ではない。又單なる感情ではない。吾等が日々の生活に於て吾等の愛を個人より家族に、家族より國家に、國家より全人類に押擴げ往くことは即ち神的生活の實現の過程である。而して愛の力を以て全宇宙を抱擁する人は同時に眞の自我人格を自覺せる人であつて、個人と社會との對立は最早、彼の內にあらず、彼れの社會我は宇宙的自我を體現せるものであつて、家族や國家を超越して全人類全宇宙に對し、淸き愛の奉仕を以て我が人格の生命とするに至る。所詮吾等の宗敎は淸き愛の奉仕を以てする人格の完成を目的とするもの、日本の國民道德をして家族

と國家を超越して、個人及社會の道德たらしむるには先づ吾等の主張する如き現代的宗敎を以て之を靈化し聖化して、而して其擴張（エキスパンション）と深化（インテンシフィケエション）を計らねばならぬ。是れ覺醒せる日本國民、殊に敎養ある青年諸君の責務である。

國民生活の改造 終

大正八年十二月十七日印刷
大正八年十二月二十日發行

【定價金參圓參拾錢】

國民生活の改造
奥付

不許複製

著者　帆足理一郎
發行者　河本龜之助
東京市麴町區平河町五丁目三十六番地
印刷者　河本俊三
東京市麴町區埼町二十番地
印刷所　洛陽堂印刷所
東京市麴町區麴町二丁目九番地

發行所　東京市麴町區隼町二十番地　洛陽堂
電話九段九六六番
五一一番
振替東京二〇九一四番

帆足理一郎譯著

△宗教と人生　定價壹圓九拾錢　送料十二錢

△哲理と人生　定價壹圓七拾錢　送料十錢

△人生詩人ブラウニング　定價壹圓八拾錢　送料十錢

△教育哲學概論　定價參圓八拾錢　送料廿七錢

教育及家庭書

書名	著者	定價	送料
■子供の友 一日一話（自一月至五月）	田村直臣	各、四五	各六
□輕便旅法 山と海	竹中繁次郎	、七〇	八
■養生の話	高橋信	、四五	四
□世界自然科學史	黑田啓次譯	二、五〇	一八
■面白き科學の話	若林欽	一、八〇	一〇
□海の自然科學	同	一、六〇	一〇
■今昔船物語	同	一、九〇	一三
□蜘蛛の生活（ファーブル著）	英義雄譯	一、七〇	八
■動物の智慧	洛陽堂編	、四五	四
□動物界の挿話	原正二	一、〇〇	六
■天界の神秘	原正二	一、〇〇	六
□日本に於ける歸化植物	平山常太郎	一、〇〇	六
■黴菌と日常生活	太田透	一、四〇	八
□人生二百年	渡邊喜三	一、二〇	一六
□花と人生	天野藤男	一、二〇	八

教育及家庭書

書名	著者	定價	送料
□通俗肺病の豫防と療法	鳥潟豐	、九〇	四
■天候と人生	關衛	一、六〇	八
□花園生活	中村秋人	、七〇	八
■赤石白峰山脈縱橫記	原口亨	一、五〇	一〇
□朝鮮金剛山探勝記	菊池陶芳	一、一〇	四
■通俗孝子傳	石川弘	、六〇	八
□米國國民性の新研究	鈴木牛三郎	一、三〇	一三
■我國民性としての海魂	山崎米三郎	一、五〇	一〇
□羅馬字讀本	洛陽堂編	、〇八	二
■親と月夜	阿武信一	品切	

教育及家庭書

書名	著者	定價	送料
■教育に應用したる兒童研究	高島平三郎	四、〇〇	一八
□婦人の生涯	同	一、四〇	一四
■女の心（嫁と姑）	同	、五〇	四
□家庭及家庭教育	同	一、〇〇	一〇
■心理百話	同	、六〇	四
□學校及家庭に於ける兒童生活の研究（ドラモンド著）	高島平三郎・山本源之丞	三、三〇	一八
■兒童學概論	關寛之	三、〇〇	一六
□父母と教師のため玩具と教育	同	一、七〇	八
■輓近の兒童研究	同	一、九〇	一〇
□教育哲學概論（民本主義と教育）	ディウイー著・帆足理一郎譯	三、八〇	一八
■兒童保護の新研究	岡村準一	二、二〇	二四
□帝王教育思想史	西田宏	八、〇〇	二四
■教育期兒童健康法	稻葉幹一	一、三〇	一三
□母のための小供の心	高崎能樹	、七五	六
■家庭に於ける婦人の覺醒	高峰傳	一、九〇	一〇

教育及家庭書

書名	著者	定價	送料
□家庭に於ける兒童の愛護	同	三、〇〇	一〇
■不用意が招く愛兒の死	河合三郎	一、七〇	一〇
□小兒の育て方	田結宗誠	、五〇	四
■女教員の眞相及其本領	後藤靜香	一、五〇	一〇
□若き婦人の行くべき道	沼田笠峰	、八〇	六
■若き婦人の結婚と自覺	同	一、六〇	八
□怒るな働け	嘉悦孝子	一、五〇	八
■奥様とお女中	福鎌恒子	、六〇	八
□新案料理法	若林欽	、八〇	六
■少女物語 赤い夢	吉屋信子	、六五	六
□夜半にひとり	上澤謙二	、六〇	四
■又逢ふ日まで	同	、六〇	四
□幼なけれども	同	、八〇	四
■知らぬ御國へ	同	、八〇	四
□學校體操の原理及教授法	向井虎吉	品切	

787
9f

B.2.4

終